

社会科教室 123 号

平成元年度

社会科教育研究のあゆみ

香川県小学校教育研究会社会部会
香川県社会科教育研究会

原点を見つめながら

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県社会科教育研究会
会長 亀 山 信 夫

今年度も又各都市の熱心な社会科研究に支えられて、香社研並びに香小社研の研究を終えることができた。

月例集会の折に見せていただいた若いエネルギーな研究は、昨年度と同様に大変印象に残るものであった。又樋本副会長さんのお骨折りによって夏季研究集会が小豆島の地で行われたことも特筆すべきことであった。暑い夏季休業中も厭わず、土庄小学校の若い先生方が、全学年にわたって新しい教材開発による授業を展開していただいた。更に前会長の岡野 啓氏の「今、社会科教師に求めたいこと」の講話もあり充実した研究を行うことができた。心からお礼を申し上げたい。

いよいよ平成二年度、新学習指導要領への移行の年に入る。生活科は勿論のこと、中学年の地域学習、高学年の産業学習や人物を中心とした歴史学習などについて、内容的にも方法論的にも実践的研究を深めなければならない。教材開発のこと、基礎的基本的内容や思考力、判断力、表現力の育成のことなどについて更に研究を積み上げ、教育課程編成の方針にも述べられている「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成、個性を生かす教育」などを日々の実践の中に具現化していかなければならない。

実践なき理論も空しいが、理論なき実践も又多くの教師の共感と納得を得ることはできないし、結果として望ましい方向に子供を育てることにならなくなってしまう。変化の激しい時代であればあるほど、又社会科に対する考え方が多様であればあるほど、流行に身を任せないで、「社会科とは何か」「社会科における思考力、判断力、表現力とは何か」など、原点を見つめることを大切にしたいものである。今は、そんな時ではないかと思えてならない。

平成二年度も又お互いに切磋琢磨しながら、伝統ある香川の社会科研究を更に充実させたいものである。

目

次

原点を見つめながら	香社研会長	1
香社研総会		3
定例研究会		4
6月定例会		6
7月定例会		8
香社研 夏季研修会のようす		10
9月定例会		12
10月定例会		14
11月定例会		16
1月定例会		18
2月定例会		20
香社研提案 個性を生かし、基礎基本を大切にする社会科学習		22
小豆社研の取り組み		50

香社研総会

1 日 時 平成元年 4月30日(日)

9:30~12:00

2 場 所 附属坂出小学校

3 日 程 9:30~ 理事会

10:30~ 総会

12:00 閉会

4 内 容

(1) 研究の方向について

- ・ 前年度の研究経過
- ・ 平成元年度の研究主題

地域プランに基づく社会科学習の展開

－個性を生かし、基礎基本の定着を図る学習過程の研究－

- ・ 研究内容

(2) 研究組織について

(3) 研究計画について

- ・ 定例会
- ・ 夏季研修会

定例研究会

6 月定例会（高松） 6 月 24 日，高松市立四番丁小学校

- ・ 実践発表，パネル討議
- ・ 提案者 松本けい子先生， 日下 哲也先生
上井 嘉先生， 大島 裕子先生
- ・ 指導者 牟禮 良典先生（高松市教委主任指導主事）
関根 建一先生（高松市教育文化研究所）
植松 勝先生（高松市亀阜小学校教頭）

7 月定例会（丸亀） 7 月 1 日，丸亀市立郡家小学校

- ・ 5 年 「伝統を生かした工業」－丸亀うちわ－
- ・ 授業者 久保山 学先生
- ・ 提案者 樋口 昌樹先生
- ・ 指導者 山下 清明先生（仲多度出張所主任指導主事）

9 月定例会（仲善） 10 月 14 日，多度津町立多度津小学校

- ・ 6 年 「条約改正」
- ・ 授業者 島田 英夫先生
- ・ 提案者 高橋 義徳先生
- ・ 指導者 旅田 敏弘先生（附属高松小学校）

10月定例会（坂出） 10月28日，坂出市立東部小学校

- ・ 6年 「野口 英世とその時代」
- ・ 授業者 大野 史子先生
- ・ 提案者 川中 祥照先生
- ・ 指導者 渡邊 平一先生（香社研常任指導者）

11月定例会（綾歌） 11月18日，綾南町立陶小学校

- ・ 6年 「戦前戦後の暮らしと新しい日本」
- ・ 授業者 有岡 俊文先生
- ・ 提案者 大西 浩史先生
- ・ 指導者 河津 学先生（香社研常任指導者）

1月定例会（三観） 1月20日，観音寺東小学校

- ・ 6年 「アメリカの暮らし」
- ・ 授業者 原 直史先生
- ・ 提案者 平川 博先生
- ・ 指導者 各務 清先生（善通寺市教委主任指導主事）

2月定例会（大川） 2月10日，寒川町立石田小学校

- ・ 5年 「新高松空港と産業」
- ・ 授業者 広瀬 強先生
- ・ 提案者 向山知恵子先生
- ・ 指導者 古市 聖治先生（香社研常任指導者）

— 6 月定例会の研究内容 —

1 日時 6月24日(土) 14:00～16:30

2 場所 高松市立四番丁小学校

3 実践発表

- ・ 低学年 「生活科の実践」 松本けい子(亀 阜 小)
- ・ 中学年 「地域学習の実践」 日下 哲也(栗 林 小)
- ・ 5 年 「日本の農業の実践」 上井 嘉(太 田 小)
- ・ 6 年 「日本の歴史の実践」 大島 裕子(四番丁小)

4 パネル討議

司 会 徳田(一宮小)

パネラー 大島, 亀井(四番丁小)

藤本(栗林小)

池田, 旅田(附高小)

5 発表内容

— 問いと論証の調べ学習について —

- (1) 問いと論証で組み立てられる社会科の授業はどのようなものか
- (2) 問いと論証の過程と各学年の系統はどうなっているか
- (3) 問いと論証の調べ学習の論を, 自ら学ぶことから考える

6 討議内容

- ◎ 調べ学習の発展として, 「問いと論証の調べ学習」を考えた。
- ◎ 調べ学習の中で子どもたちにつけたい力は, 問う力である。

◎ 中学年では、大量の問いで構成される授業が可能であり、大量の疑問 → 多様な問いを含む調べ問題 → 見通しのある学習問題 → 自分の論理へと学習が進められる。

◎ 「問う力」と「論証する力」は、学び方の基礎・基本と考えられる。

◎ 自ら学んでいく力、あるいは自ら必要とする力を創りあげていく力、これが自己学習能力である。

◎ 「問い」を持つ過程と「論証」の過程を従来の調べ学習の中に位置づけていくことで、自己学習力が育つ。

◎ 学習とは、自己評価の連続である。それは、次のように考えられる。

- ・ 自分の問いを持つ。
- ・ 自分の問いを全体の中で交流させて、調べながら問いを深め、全体の学習問題へと価値を高めていく。
- ・ 学習問題に対して、自分の見通しを持って調べ、論証していく。
- ・ 自分の見通しを交流して、論証を確かなものにしていく。

7 指導（植松 勝先生、関根建一先生、牟禮良典先生）

調べ学習は、新指導要領の内容に対応した学習論であり、全国的にみてもすぐれたものである。その調べ学習の充実と発展としての「問いと論証の調べ学習」は、単なる表現とか活動とかだけを重視する学習ではなく、基礎・基本も大切に考えた学習論になっている。

7 月 定 例 会 の 研 究 内 容

- 1 日時 7 月 1 日 (土) 14:00 ~16:30
- 2 場所 丸亀市立郡家小学校
- 3 研究授業
 单元名 5 年 伝統を生かした工業 — 丸亀うちわ —
 授業者 久保山 学 (郡家小), 提案者 樋口 昌樹 (城東小)
- 4 提案内容
 - (1) 丸亀社研の研究テーマについて
「基礎・基本を明らかにし、子ども一人ひとりが意欲をもって学ぶ 社会科学習のあり方を求めて」
 - (2) 伝統的な技術を生かした工業の教材化の視点について
 - ・ 伝統的な技術を生かしていること
 - ・ 原料や土地の条件を生かして生産していること
 - ・ 生産する人々の技術や製品のもつ意味
 - (3) 教材の価値 (丸亀うちわをとりあげた理由)
 - ・ 伝統的な手法、技法が江戸時代より継承されている。
 - ・ 地域の気候や土地条件と結びついて生産が起こっている。
 - ・ 全国生産量の90パーセントを占めている。
 - ・ うちわづくりを部分的に体験でき、職人の技術のすばらしさや苦労を実感できる。
 - (4) 单元構成について
 - ・ 丸亀うちわでの学習を基礎に、全国の伝統工芸の学習へ
 - (5) 本時の学習について
 - ・ 前時に学習問題を設定し、調べてみようという意欲化を図っておく。
 - ・ 西本さん (職人) の個人年表から、職人の工夫や願いを見つける。
 - ・ 発問を明確にし、年表等の資料活用能力の育成を図る。

5 討議内容

- ◎ 教師の指示が多く、子どもが主体的に学んでいないのではないか。
- ◎ 教師は子どもの意見を取り上げ、授業の流れの中にもっと生かしていかなければいけない。
- ◎ 指示ではなく、助言とか賞賛をもっと増やしていくことが必要ではないか。
- ◎ 伝統とか技術が、今にどのように生かされているのか、現在の社会にどのような意味を持っているのだろうかという内容の視点も重視すべきだろう。

6 指導（山下清明先生）

(1) 授業をみる視点

- ・ 残しておきたいものはあったか。（内容があったか。）
- ・ 楽しかったか。（意識がとぎれなかったか。）
- ・ 協力できたか。
- ・ 資料はみやすかったか。
- ・ 疑問が残ったか。

という5つの視点で授業を見るようにしている。

(2) 指示について

指示が必要な子ども実態があれば、その時には必要である。しかし、子どもに資料の見方や考え方を育てて、指示は減らすべきである。

(3) 内容について

大切なポイントは、手作業でしかできないということ。だから、一本ずつ違った作品ができる。

(4) 能力について

今日、主体的に対応する力を育てることが重要ではないか。その力には、事象に問いかける力と、それを処理（解決）する力であらう。

7月27日(木)

1. 主 催 香川県小学校教育研究会社会部会

2. 日 程

(※進行-----柳 敬子教頭先生)

場 所	時 刻	内 容						
土 庄 町 立 土 庄 小 学 校	9:00 9:30	受 付						
		提 案 授 業						
		学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
		単 元 名	おうちのしごととおおいよ	ぼくらは、ゆうびん屋さん	工場のしごととくふうごま油工場	水を求めて蛙子池をつくった太田典徳	自動車の生産のさかんな地域	本居 宣長
		授 業 者	坂本 弘子	役重 和雅	大山 博文	山本 義博	坂本 史代	岡本 英孝
		協力者	郡 多田 由紀	林 明子	黒川 和仁	大嶋 和彦	羽座 則史	寺嶋 俊秀
		県	政岡 恵子	松本けい子	香川 佳和	小原 敏昭	福岡 靖芳	前川 保雄
		記 録 者	佐立 裕美	江口 真紀	内海 政代	田中 秀年	土井 早苗	森 昭二
	10:15	休 憩						
	10:30	分 科 会 討 議						
土 庄 町 立 中 央 公 民 館		学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
		司 会 者	竹田 具治	蓮本 和博	野村 一夫	森口 訓行	原 直史	亀山 典良
		提案者	郡 三崎 彰夫	福井 治美	眞井 孝征	岩崎 正敬	姫田 朋樹	田岡 直樹
		県	筑後 暁美	真鍋 朗子	波多 誠	虫本 利久	佐長 健司	山下 敦
		記 録 者	益田 隆子	松川 幸代	山谷 元子	池田 誠	馬淵 彰子	高橋 克佳
		指 導 者	古市 聖治	河津 学	大西 孝典	梅木 正信	植松 勝	土岐 道憲
	12:00	昼 食 ・ 移 動						
	12:50	(※体育館で昼食)						
	13:10	アトラクション						
	13:30	開 会 式						
13:45	全 体 提 案 土庄小学校の研究の取り組み 土庄小 教諭 大山 博文							
14:10	本 部 提 案 社会科学習の改訂の方向と香社研の課題 香大附属高松小 教諭 池田 孝徳							
	各 分 科 会 報 告 ・生活科分科会 (丹生小) 竹田 具治 ・地域学習分科会 (岡田小) 野村 一夫 ・産業学習分科会 (観東小) 原 直史 ・歴史学習分科会 (高篠小) 亀山 典良 記録者 大川：長尾小 松田 章子							
15:10	休 憩							
15:20	講 評 今、社会科教師に求めたいこと 前善通寺市立中央小学校 校長 岡野 啓 先生 記録者 木田：田中小 脇 広久							
16:10	閉 会 式							

7月27日(木)

1. 主催 香川県社会科教育研究会

2. 日程

(※進行-----事務局)

場 所	時 刻	内 容
銀 星 旅 館	19:00	これからの地域学習の在り方を探る 1. 提 案 「私が実践したい地域学習」 2. 討 議 3. 指 導
	21:00	提案者 香大附属坂出小 教諭 宇山 知昌 高松：古高松小 教諭 溝内 哲也 司会者 香大附属高松小 教諭 七條 正典 指導者 文部省教科調査官 高野 尚好 先生 記録者 高松：木太小 教諭 高野 尚好 先生 多田 明広

7月28日(金)

(※進行 ----- 事務局)

場 所	時 刻	内 容
附 属 高 松 小 学 校	9:00	受 付
	9:30	授 業 説 明 香大附属高松小 教諭 旅田 敏弘
	9:45	提 案 授 業 4年 「沖永良部島に生きる人々」 授業者 香大附属高松小 教諭 旅田 敏弘 記録者 香川：浅野小 教諭 篠田美津子
	10:30	休 憩
	10:45	代 表 者 討 議 討議者 大川：本町小 佐藤 正文 司会者 香大附属坂出小 教諭 岡根 淳二 小豆：豊島小 眞井 孝征 記録者 坂出：東部小 教諭 鈴木 清子 高松：四番丁小 大島 裕子 指導者 高松市教委主任指導主事 牟禮 良典 先生 坂出：東部小 川中 祥照 仲多度出張所主任指導主事 山下 清明 先生 仲善：中央小 森井 信一 三観：勝間小 安藤 通 高松：附高小 旅田 敏弘
	12:30	移 動 ・ 昼 食 (※銀星旅館で昼食)
	13:30	講 演 演 題 これからの地域学習の方向 —— 生活科との接続・発展を考慮した地域学習 —— 講 師 文部省初等中等教育局小学校課教科調査官 高野 尚好 先生 記録者 綾歌：滝宮小 末澤 康彦 丸亀：城東小 香川 浩子
	15:30	閉 会 式
	16:00	

- 9 月 定 例 会 の 研 究 内 容 -

1 日時 10月14日(土) 14:00~16:30

2 場所 多度津町立多度津小学校

3 研究授業

单元名 6年 条約改正

授業者 島田英夫(多度津小), 提案者 高橋義徳(東小)

4 提案内容

(1) 仲善社研の研究テーマ

「新学習指導要領の趣旨をふまえ,

基礎基本の定着をめざす社会科学習」

(2) 新学習指導要領をふまえた条約改正のとらえ方

- ・ 単元の基礎的事項について
- ・ 単元の基本的事項について

(3) 本時の主張点

- ・ 児童の興味や関心を重視した人物学習

◎ 薩摩の若い武士たちという人物群を扱うことで、より身近に当時の人々の願いを感じ、彼らのくじけない積極的な生き方に共感していけるのではないか。

- ・ 調べ学習による授業の展開

◎ 条約改正を人物の動きと国の動きの二本の柱でとらえ、明治政府の富国強兵政策と薩摩の若い武士たちを中心とした人物の動きとをつないで調べ学習を進めさせる。

- ・ 本時の基礎的事項と基本的事項

5 討議内容

◎ 東郷平八郎を取り上げるということは考えなかったのか。どうして、薩摩藩の若い武士たちを取り上げたのか。

◎ 教師の指導性が強すぎるのではないか。

- ◎ 年表の見方の指導をしたのはよかったし、教師の発問、助言、板書は的確であった。
- ◎ 年表の見方については、子どもたちにまかせてもよかったのではないか。子どもなりに因果関係を探らせてもよかったのではないか。
- ◎ 子どもの活動と教師の指導をどう調和させるのかということが課題ではないか。

6 指導（旅田 敏弘 ）

（１） 子どもの活動と教師の援助をどう統一させるか

新指導要領の基礎・基礎の徹底と個性の伸長という２点の調和を図ることが大切であり、そのためには、子どもの表現の中にある基礎・基本を教師が取り上げ、学習の中で生かしていくという姿勢が必要である。しかし、いつも子ども中心というのではなく学び方や内容について、教師が子どもたちに教えるという時期 や時間もある。

（２） 基礎・基本をどう考えるとよいか

事項（知識）だけでなく、問いを持つ力や問いを解決していく力（表現力、思考力）も合わせて基礎・基本を考えていかなければ、社会の変化に対応できなくなるのではないか。

（３） 年表の指導

３年からの系統をふまえ、年表の指導を考える必要がある。６年生においても、指導は必要だが、自分が年表の中で問いを発見し、それを解決していくヒントを見つけていくというような扱い方もあるのではないか。

（４） 歴史上の人物の扱い方

適当な人物がいない場合、人物群をとりあげるというのは良い提案だと思う。

- 1 0 定例会の研究内容 -

1 日時 10月21日(土) 14:00~16:30

2 場所 坂出市立東部小学校

3 研究授業

单元名 6年 野口英世とその時代

授業者 大野史子(東部小), 提案者 川中祥照(東部小)

4 提案内容

～ 感動力を高めるための私の主張 ～

(1) 感じる場の重視

写真や地図, エピソードを生かして, この時代を主体的に追究させる。

(2) 表す活動の重視

その時代と照らし合わせた個人史を作ったり, 絵や脚本に書いたりして, 近代化の進む明治・大正時代を生きた野口英世の苦勞と業績を実感的にとらえさせる。

(3) 深める手だて

野口英世＝「努力の人」という理解にとどまるのではなく, 英世を生み出した時代背景を探ることが, 学習の深まりだと考える。そのため, 年表や文書などの資料の活用が重要になってくる。

グループで話し合って, 紙芝居にすることで友達と考えを深めることもできる。

5 討議内容

◎ 野口英世を社会科として, どのように扱ったらいのだろうか。そこで身につける社会認識とはなんだろうか。

◎ 時代をどう教えるかということとつないで, 野口英世を通して学べるものが何か, はっきりさせる必要がある。

時代像が社会認識ではないか。

- ◎ 国際的地位の向上ということとつないで、英世の生きざまをもっと前面に出すことが大切ではないか。
- ◎ 新しい人物を積極的にとりあげるということは、たいへん良い。しかし、「どうして英世は医学者として、世界で活躍できたのだろうか」という問いは、適切ではないのでは。
- ◎ 問いは連続しているのではないか。その過程で価値のある問いを生み出すということが必要では。
- ◎ ある子の価値のある問いを、みんなに返してやったら良かった。

6 指導（岡根先生，石原先生，岡野先生，渡辺先生，曾根先生）

- （１） ４２人目の人物をどう扱っていくかということで成果があった。見えない歴史というものを人物を取り上げることで思考可能な見えるものへと変えていくことができるのではないか。
- （２） 学習問題と答えとの関係が少しずれているのではないか。努力したから海外へ行ったというふうに考えていいのか。
- （３） 今は地図の時代ではなく，地球儀の時代である。
当時の日本人の考えと野口英世という個人の考えをどうつないで考えるかが課題である。
- （４） 歴史を学ぶ楽しさを重視したい。年表のことばが，具体的なイメージとなっていかなくでは考えもでてこないのではないか。
- （５） 広い視野で，世界の中で人物を考えていくことが重要である。野口英世をつかむとは，伝記などを読んで自分のイメージをつくること，創造することではないか。

これからの授業は，子ども一人ひとりに心をよせていく授業でなくてはいけない。

- 1 1 定例会の研究内容 -

1 日時 11月18日(土) 14:00～16:30

2 場所 綾南町立陶小学校

3 研究授業

单元名 6年 戦前戦後のくらしと新しい日本
～ 民主化への歩み ～

授業者 有岡俊文(陶小), 提案者 大西浩史(岡田小)

4 提案内容

(1) 研究主題

社会科における学習力を育てる授業のあり方
～ 資料活用力の育成を通して ～

(2) 研究の視点

◎ 基礎・基本の定着

社会科で育てる学力は、次の4つである。

知識・理解	歴史上の主な事象を通して、国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や文化遺産について関心と理解を深める。
社会的事象に対する 関心・態度	我が国の歴史や伝統を大切にする心情を育てる
観察・資料活用 の能力	地図、年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用することができる。
社会的思考力・ 判断力	社会的事象の意味をより広い視野から考える。

◎ 資料活用能力の育成

- ・ 資料収集力(聞き取り調査)
- ・ 資料整理力(情報カード)

5 討議内容

- ◎ 資料集めがすばらしく、たいへん参考になった。
- ◎ 戦後の人々の生活を、どう学習指導計画の中に位置づけているのか。もっと、重視すべきではないか。
- ◎ 6つの諸改革（軍隊の解散、治安維持法の廃止、選挙法の改正、労働組合法の実施、農地改革、教育改革）を取り扱っているが、多すぎるのではないか。その中で、1つをもっと詳しくみていくという学習も考えられる。
- ◎ 戦前が悪く、戦後の改革は良いというふうに簡単に考えることになるのではないか。
- ◎ 憲法とのつながりを考えるということは、思考力を練る上で効果があったと思うが、人々の願い→諸改革→憲法という学習の流れよりは、逆に考えていくほうが因果の思考力を育てることになるのではないか。

6 指導（河津 学先生）

（1） 研究授業の持ち方について

研究授業の持ち方を検討する必要がある。それは、1つの授業を見ての討議であれば、別の視点からの意見が出てそれで討議が終わってしまい、深まりが期待できない。だから、授業を2つしてその比較検討をするという方法がよいのではないか。1時間の時間を2つということは、時間的に無理があるのなら、導入部分だけを2つしてもいい。

授業の持ち方、討議の仕方を工夫してほしい。

（2） 良い授業とは、（上田薫著、人間の生きている授業より）

- ・ 立往生せよ
- ・ 山をつくれ
- ・ 桔抗を生かせ
- ・ ひっくり返しをせよ
- ・ あとにひく終末にせよ

- 1 月定例会の研究内容 -

1 日時 1月20日(土) 14:00~16:30

2 場所 観音寺東小学校

3 研究授業

单元名 6年 アメリカのくらし

授業者 原 直史(観東小), 提案者 平川 博(麻小)

4 提案内容

(1) 学習指導要領の改訂に当たって

- ・ 新旧学習指導要領の比較
- ・ 第6学年の目標をどうとらえるか
- ・ どの国をどのように取り上げるか

(2) 研究テーマ

◎ 調べ活動を生かし、社会認識を高める社会科学習

- ・ 個性的な理解の仕方を通した基礎基本の修得
- ・ 子どもが“考える”指導過程の研究

◎ 個性的な分かり方を大切にすると、

- ・ 自分の生活経験から、多様な視点をたくさん出させる。
- ・ 知識や体験を積み重ねていく。
- ・ 一人ひとりの興味関心を大切にし、理解への援助をする。

(3) 本時の授業構成

教材 → 発問 → 多様な反応 → 考えの深まり → 両国の考え

◎ なぜ、バス・トイレなのか。

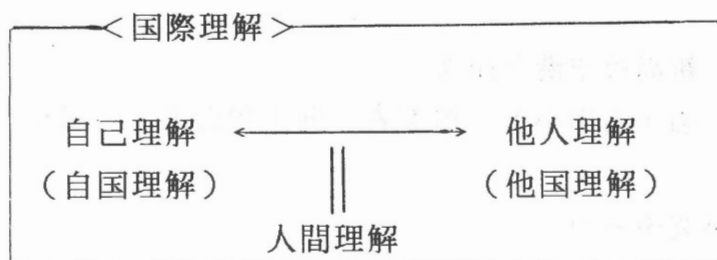
◎ なぜ、対比思考をさせるのか。

◎ 国際理解するとは、

- ・ 相手の考えや行動の意味を内側から理解することのでき

る心情を持つ。

- ・ 違いを知る。
- ・ 違いを認める



5 討議内容

- ◎ バスルームの作りや数のアメリカと日本に違いについて、どちらがか好きかというように討論したのでは、内容の深まりがないのではないか。
- ◎ 子どもたちは、バスルームの違いを知り、どちらが好きかとか、そのわけについてよく発表していた。
- ◎ バスルームの違いから、アメリカの人と日本人との考えの違いを探るという過程で、資料の提供等の教師の援助がもっと必要だったのでは。
- ◎ 施設の違いだけでなく、その使い方とかについてももっと調べることも必要だ。

6 指導（各務 清先生）

- (1) 国際化ということで、アメリカのくらしを取り上げた授業は、教材の開発ということで成果があったと思う。
- (2) どの子どももよく発表し、意欲的に学習できるような指導過程であったと思う。
- (3) 内容的には、もう少し、アメリカの人がそうしているわけとか、日本人との考え方・習慣の違いというあたりを追究すべきだったと思う。

- 2 月 定 例 会 の 研 究 内 容 -

- 1 日時 2月10日(土) 14:00~16:30
- 2 場所 石田小学校
- 3 研究授業
 单元名 5年 新高松空港と産業
 授業者 広瀬 強(石田小), 提案者 向山智恵子(引田小)
- 4 提案内容
 (1) 大川社研 研究テーマ

基礎・基本を大切にした社会科学習
 ～生き生きとした表現活動を通して～

(2) 研究テーマについて

- ◎ 表現することは考えることである。
 「人間関係調整能力」や「表現能力」の育成
- ◎ 子ども主体の学習をすることで、表現が生き生きとしてくる。
- ◎ 单元の中へ表現を位置づける。
- ◎ 多様な表現の方法を取り入れる。

表現の方法

類 型	主 な 活 動
動 作	動作化 , 劇づくり , 役割演技 etc
図・表	構成図 , 設計図 , しくみ図, グラフ etc
絵 画	絵図 , 立体模型 , 絵地図, 紙しばい , カルタ etc
言 語	絵本 , ノート , 新聞 , 紙しばい , 討論 , 文章表現 etc
記 号	色カード etc

5 討議内容

- ◎ 実物（空輸するヒラメ）を提示しての学習で、子ども意欲が高まったと思う。
- ◎ 農業と交通との関係はどうなっていたのか。フライト農業の学習と交通網の広がりということが結びつきにくかったのではないか。
- ◎ フライト農漁業の調べの中に交通の資料があれば、新高松空港の航空路計画図とつながったのではないか。
- ◎ 新高松空港の航空路計画図の資料は、国土の広がり（空間認識の広がり）をとらえるのに効果的だった。5年生段階での国際化の視点にもなるのでは。
- ◎ フライト農漁業を考える時に、軽くて、高い品物という視点が重要ではないか。
- ◎ 導入時の、新空港の特色（速い、運賃が高い、衝撃がある）視点でカードを整理すれば、活動が整理され、内容もわかりやすかったのではないか。

6 指導（古市 聖治先生）

（１） 21世紀への社会科実践の課題はなにか。

先輩や香社研の歴史に学ばなくてはいけない。これから何を教えていくのかということを見つけていくことが必要である。

< 参考文献 >

- ・ 社会科を底辺から支えよう
- ・ 今、新しい社会科の構想を
- ・ 社会科はどんな子どもを育てたか
- ・ 体系化された社会科を
- ・ 新しい社会認識教育哲学待望
- ・ 21世紀の市民資質の解明
- ・ 自己確認と国際化への対応

【香社研提案】

研究主題

個性を生かし、基礎基本を大切にする社会科学習

— 一人ひとりが主体的に学ぶ学習指導 —

香川県社会科学教育研究会 池田 孝徳

I 新教育課程に向けての地域プランの確立

1. 教育課程編成の基本方針から

新小学校学習指導要領が平成元年3月15日に告示され、第I章総則の第1の教育課程編成の一般方針においては、教育課程編成の基本的な仕組みを示すとともに、教育課程の編成において、特に配慮する必要の事項について次のように示している。

教育課程編成の原則（第I章第1の1）

各学校においては、法令及びこの章以下に示すところに従い、児童の人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階や特性を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとする。

学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

上記の配慮事項は、二つの項目に分けることができる。前段の地域、学校及び児童の実態を考慮に入れるということは、教育課程編成の基本原則である。

教育課程の編成主体について「学校において」を「各学校において」に変更している。これは、今回の改訂の趣旨を生かすため、各学校が主体性を一層発揮して、教育課程の編成を行う必要があることを強調したものである。

このことは、地域の多様な特性を生かした活力に満ちた地域社会の実現を望む声が高まってきており小学校教育においても地域や学校の実態に即し、各学校の創意工夫を加えた教育課程の編成・実施が求められているということである。

この地域の実態に即した教育課程の編成・実施とは、単に地域ごとに独自の教育課程をつくるとか、地域について学習するための教育課程をつくるといったものではない。その意義は、およそ次の3点である。

- (1) 学習の主体者である児童の実態に注目しつつ、そこから教育活動を出発させる。
- (2) 教室の中での児童を閉じこめた定型的な授業を展開するのではなく、地域の環境条件を活用して創意工夫を加えた積極的な学校教育のあり方を目指すものである。

- (3) 地域に即した教育は、学校と地域社会との信頼、協力の関係を確立することを目指す。

つまり、単に「社会科指導をどうするか。」「地域教材を取り上げた社会科指導はどうあるべきか。」といった視点からの研究では、今日的課題の解決は果たし得ない。

各校の教育課題は何なのか、また、それが見えてくる研究でなければならないのである。

2. 地域プラン作成にあたって

地域プランとは、地域の教材をいかに取り入れた社会科指導をするのかといったものでないことは前述の通りである。学校の教育課題をどうふまえ、学校の教育目標達成のためにどうカリキュラムを編成・実施するかという学校教育の全体像の中での社会科指導のプランを作成することが要件となる。つまり、各学校の教育目標は、地域の実態、児童の実態、父母や地域社会の期待等が集約された「学校の教育課題」を踏まえたものである。したがって、このような教育課題を踏まえた教育目標を達成するために、社会科教育のになう役割を明確にし、その具体的方策を盛りこんだ地域プランの作成が重要である。

地域プランは、社会生活に必要な知識や考えを教えるものではなく、それらの知識や考えを自ら学んでいく、学び方を学ぶ力を一人一人の子どもに身につけさせるプラン、すなわち、学ぶ意欲と能力を持つ子どもを育成することを要件としたプランである。

自ら学ぶ意欲と能力を持つ子どもづくりには、子どもを取りまく環境を生かし、子どもの生活や体験に基づく、より具体的な事実に触れ、観察（実物調べ）や表現といった実際的な問題解決の体験を通した学習こそ大切であり、このことが、香社研の地域プランによる「調べ学習」の特質なのである。

3. 個性を生かす教育の重視

新学習指導要領の総則に教育課程の一般方針が示されている。その中で配慮すべき事項として、「学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図ると共に、基礎的基本的な内容の指導を徹底し個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」としている。

このことは、今後の学校教育がめざすべき基本方向を明示したものであり、今回の学習指導要領の改正において、最も重視されなければならないところである。新しい学習指導要領の基本理念が学校教育をこれまでの「知識と技能を重視する教育」から「自ら考え、主体的に判断し、行動できる能力の育成を中心とする教育」へと質的な転換を遂げなければならないとの考えに立つものであることをしっかり受けとめねばならない。

Ⅱ 教育課程編成にあたって

1. 新教育課程の編成の視点から社会科を観る

今回の教育課程の基準の改善にあたり、教育課程審議会の答申にある教育課程改善のねらいとして、次の4つの項目をあげている。

——〔心豊かな人間の育成〕——

- (1) 教育活動全体を通じて、児童の発達段階や各教科等の特性に応じ、豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図ること。

学校教育は、人間としての調和のとれた発達を目指し、心身ともに健全な国民の育成を期して行われなければならないことは言うまでもない。今回の改訂においては、これからの社会において主体的に生きていくために必要な資質を養うという観点に立ち、学校教育の現状や児童の実態等を考慮し、豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図ることを重視することとした。特に、「真理を求める心や自然を愛し美しいものや崇高なものに感動する心を育てること」、「生命を尊重する心や他人を思いやる心を育てること」、「感謝の心や公共のために尽くす心を育てること」、「すこやかな精神と身体を育てること」、「基本的な生活習慣を身に付け自らの意思で社会規範を守る態度を育てること」、「自律・自制の心や強靱な意志と実践力を育てること」、「自ら生きる目標を求めその実現に努める態度を育てること」に配慮した。

これは、主として、これからの社会において自主的、自律的に生きる力を育てることを目指すものである。そのため、道徳を中心にして各教科や特別活動においても、それぞれの特質に応じて、内容や指導方法の改善を図ることに配慮した。

——〔基礎・基本の重視と個性教育の推進〕——

- (2) 国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育を充実するとともに、幼稚園教育や中学校教育との関連を緊密にして各教科等の内容の一貫性を図ること。

小学校教育においては、人間の一生を通じての成長と発達の基礎を培い、国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせることが必要である。

各教科の内容については、学習の適時性やこれまでの教育課程の実施の経験などを考慮し、小学校段階において確実に身に付けさせるべき基礎的・基本的な内容に一層の精選を図ることとした。その際、各教科の内容については、教育課程実施状況の調査結果などを考慮し、実際の指導において児童の発達からみて内容の程度が高くなったり、抽象的な取扱いになったりしがちなものや発展性に乏しい内容などを削除、軽減、重点化などを図ることによって一層の精選を図ることとした。

基礎的・基本的な内容を児童一人一人に確実に身に付けさせるようにするため、個に応じた指導など指導方法の改善を図ることとした。個性を生かすためには、児童一人一人が自分のものの見方や考え方をもつようにすることが大切であり、今回の改訂においては、各教科において思考力、判断力、表現力などの能力の育成を重視した。また、豊かな個性の形成は、内発的な意欲や主体的な態度に支えられる必要があり、自ら学ぶ意

欲や主体的な学習の仕方を身に付けさせることも重視した。

このように個性を生かす教育は、基礎的・基本的な内容を身に付けさせる過程を通して、さらにそれを基盤として、児童一人一人が個性を発揮しつつ生きることができる力を育てることを目指しているものである。

なお、総則の教育課程編成の一般方針において、学校教育を進めるに当たっての基本理念として基礎的・基本的な内容の指導を徹底し個性を生かす教育の充実を図るべき旨を示した。

〔自己教育力の育成〕

- (3) 社会の変化に主体的に対応できる能力の育成や創造性の基礎を培うことを重視するとともに、自ら学ぶ意欲を高めるようにすること。

これからの社会の急激な変化に対応して生きていくためには、社会の変化に対応できる能力や創造性の基礎を培うことが大切である。また、これからの学校教育においては、生涯学習の基礎を培う観点から、自ら学ぶ意欲と主体的な学習の仕方を身に付けることが大切である。

そのため、各教科の内容については、これからの社会の変化に主体的に対応できるよう、思考力、判断力、表現力などの能力の育成を重視することとした。とりわけ、創造性の基礎を培うため、新たな発想を生み出すものになる論理的な思考力、想像力、直観力を重視するとともに、科学技術の進歩や情報化の進展に対応するために必要な基礎的な能力の育成にも配慮した。これらの能力は、児童の発達段階に応じて必要な知識や技能を身に付けさせることを通して育成されるものであり、各教科の内容の改善に当たっては、それぞれの教科の特性に応じて配慮した。

また、生涯学習の基礎を培う観点から、学ぶことの楽しさや成就感を体得させ自ら学ぶ意欲を育てるため体験的な学習や問題解決的な学習を重視して各教科の内容の改善を行った。各教科の学習指導に当たっては、自ら学ぶ目標を定め何をどのように学ぶかという主体的な学習の仕方を身に付けさせることが大切である。

なお、(2)と同じく、総則の教育課程編成の一般方針において、学校のエ育活動を進めるに当たっての基本理念として、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るべき旨を示した。

〔文化と伝統の尊重と国際理解の推進〕

- (4) 我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視するとともに、世界の文化や歴史についての理解を深め、国際社会に生きる日本人としての資質を養うこと。

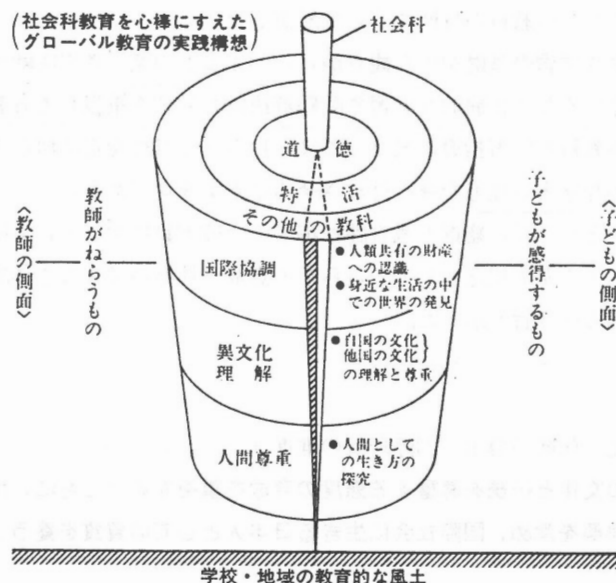
国際化が進む中であって、次代に生きる日本人を育成するためには、これからの学校教育において、諸外国の人々の生活や文化を理解し尊重するとともに、我が国の文化と伝統を大切にする態度の育成を重視していく必要がある。

そのため、我が国の文化と伝統に対する理解と関心を深め、それを大切にする態度の育成を図るとともに、日本人としての自覚やものの見方、考え方についての基礎を培う観点から、各教科等の内容の改善を図ることとした。その一環として、国旗及び国歌の指導については、日本人としての自覚を高め国家社会への帰属意識を涵養するとともに、国際社会において信頼される日本人を育てる観点から、その充実を図ることとした。

また、世界の文化や歴史に関する学習は、主として中・高等学校で行うこととしているが、今回の改訂においては、小学校段階から外国の文化等に対しても目を開くように配慮し、社会科を中心に関連の教科等の内容の改善を図ることとした。その指導に当たっては、諸外国の人々の立場や発想に立って理解できるようにすることが大切である。

上記の4つのねらいは、教育の内容と方法の改善に当たって留意すべきねらいを示すよりも、社会の根本的な変化とそれに伴う、児童の生活や意識の変容をきちんと受けとめ、今後の学校教育はいかにあるべきかについての基本的観点を示すことによって、教育課程の基準の改善のための基本的枠組みの全体像を描いているのである。

このようなことから、教育課程の基準の改善の4つのねらいは、「自ら考え、主体的に判断し、行動する力」をもった人間の形成という観点から、相互に関連するものとして、構造的に捉え、教科や道徳、特別活動を一体的なものとして考えていかねばならない。



今、学校の実態に合わせた特色ある教育課程が編成されなければならない。

現在、急務とされることは、その学校の教育目標にせまるための、教育活動全領域を総合的にとらえた学校独自の個性的なプランを持つことである。

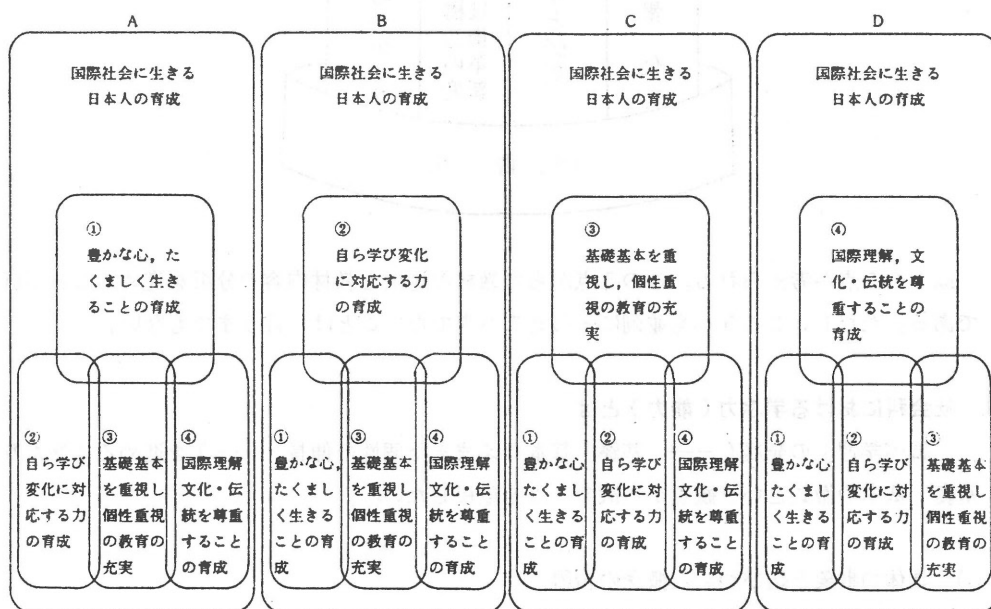
一教科である社会科においても、このような考えに立って、その学校の社会科年間計画を作成する時期を迎えているのである。

学習指導要領が告示された今、単なる地域教材の開発ということにとどまるのではなく、学校独自のプラン＝地域プランの意味を問い直す必要にせまられているのである。

次に、新教育課程編成に向けての重要な視点として、下記のことが重要であると考えられる。各学校の教育課題を踏まえ、その学校の実態や教育目標が異なるとすると、当然、4つのねらいの扱い方も軽重が必要になってくる。

単に、これまでのように4つのねらいを並列的にとらえ、どの学校も、子どもや地域や教育研究の特性に立つといいながら、よく似た教育課程を編成してきたのである。このような反省に立ち、4つのねらいを構造的、立体的に捉えなければならないのである。

社会科でみると、国際化・伝統・文化に視点をあてる学校と、豊かな心の育成に視点をあてる学校では、当然教える内容の比重も基礎・基本の内容も変わってくるのである。



2. 新しい基礎・基本の内容を求めて——基礎・基本の徹底

(社会の変化に対応した内容の基礎・基本が考えられているか)

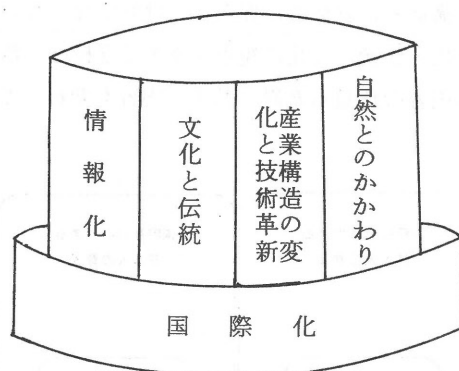
今日の社会科学習がおもしろくないと子どもに受け取られる背景には、教科書の内容すなわち事項を理解させるといった内容の浅さがあった。教材研究の視点も、教科書の事項を理解さ

せるためにどのような教材を組むかといったようなものであった。このような学習では、子どもの認識を深めることには、つながっていかない。良い授業は、深い内容観に支えられている。教師の社会を見る目こそ重要なのである。

今日の科学技術の発達と経済の発展は、物質的な豊かさを生むとともに、情報化・国際化・価値観の多様化など社会の各方面に様々な変化をもたらしている。こうした社会の変化は、私たちの生活の在り方や意識に深く影響を及ぼし、人間としての生き方にも問いを投げかけている。

社会科教育のねらいは、こうしためまぐるしく変貌する環境の中で、自然環境・社会環境と人間のかかわりを見つめ、人間としての生きかたを学んでいくことである。「公民的資質の育成」の意味をもう一度問い直す時期にきているといえるだろう。

—— こうした学習を進めるための内容の視点として ——



以上の5点が考えられる。この5点からの教材の選択と教材内容の分析を進めることが肝要である。ただし、この5点も並列にとらえるべきでないことは、言うまでもない。

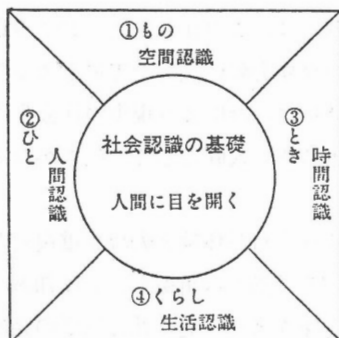
3. 社会科における学ぶ力（能力）とは

「調べ学習」の発展（—— 基礎・基本をふまえた個性の伸長 ——）を進めるにあたり、基礎・基本の徹底という観点から次の3点を重視したい。

(1) 具体の事象と結びついた概念の習得

社会科は、内容教科である。抽象化された概念が一人歩きするのではない。特に、「調べ学習」においては具体と結びついた概念の習得の過程こそ重要なのである。概念形成の過程は、まず社会事象に直接当たり、様々な事実を感情や感動とともに見つける段階から出発する。そして、調べた事実を絵カードや絵地図に表現するといった抽象化されたものに置き換える段階がある。次に、それを操作し事実間の関係づけを図る段階へと発展する。こうした関係づけの段階で、時間意識・空間意識・人間意識が重要となる。3つの意識による関係づけから概念は生まれるのである。豊かな具体と結びついた、具体の中に生きて働く概念を子

ども自身が創造することが、環境と人間生活のかかわりを見つめ人間としての生きかたを追求する上で大事なのである。



(2) 生涯にわたり、学びつづける学び方の育成は

生涯にわたる学び方の育成の上で、大きな課題は「意欲」と「学ぶ技術」の問題である。子どもの内発的動機づけを重視し、子どもの興味・関心に応じながら意欲を喚起することと粘り強く追究していく態度を育てたい。

(3) 社会科基礎技能を高める地図指導・年表指導

社会科の基礎・基本を考えると、空間意識につながる地図指導と時間意識につながる年表指導は欠かせない。生活科での絵地図づくりから系統だてて、地図指導・年表指導を進めることが重要である。作業をおりにふれて取り入れこれらの技能を日常的に身につけさせていくことが大切である。

4. 豊かな人格形成をめざす社会科教育

新教育課程の根本的な課題は、基礎・基本の徹底を基礎に個性の伸長を図ることである。即ち、基礎・基本の徹底は、人格形成上の基礎・基本をしっかりと学ぶことであり、生涯にわたり豊かな人間形成を目指して主体的に学習していく上に必要な知識や能力・意欲・態度を教えることである。個性の伸長は従来ややもすると、能力や興味・関心といった方法論上の問題として考えてきた個人の能力や特性を認め、伸ばすといった教育の目的から問い直した課題である。すなわち、新教育課程のねらいは、一見矛盾して見える基礎・基本の徹底と個性の伸長という2つの命題の統一にある。社会科もこの2つの命題の統一ということから検討を加える必要がある。

人間は、社会の中に生まれ、育ち、生活しているが、社会生活があまりに日常的であり、その意味に気づかないまま過ごしがちである。しかし、人々の精神的にも物質的にも充実で豊かな生活を求める願いは、自他ともに構成される社会において実現される。人間は、社会の発展のために課せられた役割を持ちそれを果たす存在であると同時に他人の働きによって支えられている存在である。こうした社会の中での自分の存在の発見と社会の存在の発見、そしてそれ

らのつながりやしぐみを考えていくことが、「社会生活についての基礎的な理解を図る。」ことになるのである。この、社会生活についての意味を深く考えることが、人々や社会の発展を願うその実現に努める態度を育てるもとになるのである。

社会科学習における基礎・基本は、この社会生活における意味を考え、理解させることであり、それをもとに国家や社会の発展を願い、その実現を図るために積極的に取り組む態度を育てていくことである。そのためには、なにより現実の社会生活を直視し単なる理解に終わることなく、自分の考えをきちんと持ち、人間としての生きかたをも考える社会科学習を進めることである。

新教育課程において、低学年社会科が体験と表現を重視した「生活科」への移行、そして3年からの社会科学習での「調べる活動」の重視も、実は知識の習得・暗記の学習から、現実の社会生活を重視し社会生活の意味を考え、更に社会生活の発展を願いその実現に努力する態度を育てる学習への転換を意図したものであると考える。

3. 子どもの社会化・個性化を図る調べ学習

(1) 個人差に応ずるめあては、発達課題にある。

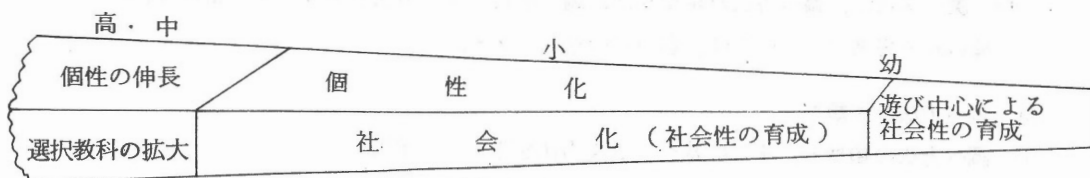
人間の発達の過程、教育の過程には、発達段階に応じて、その年齢にふさわしい行動なり、考えなり、個性の生かし方なりの発達課題があるとされている。それぞれの発達段階において、次の発達段階までに達成しておかなければならない課題があるのである。社会化・個性化の過程を学習論としてみていく上で、子供をどう育てていくのか、発達段階に応じて、課題を明確にする必要がある。人間として生きていく基礎・基本となることを身につけていくという社会化とその子なりの個性を伸ばしていく個性化が、それぞれの学年でどこまで達成しなければならぬのか明確にしないと、「社会化・個性化」の過程の重視を叫んでも、実践には結びつかないものである。

① 子どもの発達課題を踏まえた学習

自ら学ぶ学習は、学年の発達段階に即して調べ学習の発達課題があるのではないかと考えた。つまり、それぞれの時期にどうしても身につけておかなければ「一人立ちの教育」が達成できなければならぬ課題を考え、次のような調べ学習における発達課題を設定した。

6	5	4	3	2	1	学年
自 発 性		活 動 性		自 立 性		発達課題
自発的活動をうながす。 自他の関係の中で 矛盾克服のために 過ちを自己修正し、 一人調べを通して、 自発性を生かした 一人調べを		自他の人間関係の中で 自分の態度を反省する。 活動の内面化を図り、 考えを調整する中で、 グループ内での自他の		自立性を伸ばし、 共同作業によって 役割分担による 調整する。 自分の役割の在り方を		社会科(調べ学習)における 発達課題

人格形成のための発達課題



この発達課題で気づくことは

- (ア) 子供はある時期になると、自ら学ぶことによって、課題を達成できる条件が整ってくる。
- (イ) 子供は個人として課題が達成されるだけでなく、人間と人間との営み（関係）の中で、自己を調整しながら課題を達成すること。
- (ウ) 子供の発達課題の達成にあたって、内発的動機（知的好奇心）に基づく意欲と活動が深く関わっていること。

香社研では、この3点を社会化、個性化の過程における、すなわち、調べ学習における発達課題達成の要件と考え、上記のような自ら学ぶ学習としての発達課題を設定した。社会科学学習も、人間形成の重要な役割を担うということから、人間づくりのための発達課題を設定しているのである。

- (2) 個人差に応ずるとは、「子供の意欲ある活動」と「基礎・基本」の統一により可能になる。個人差に応ずる学習を進めるにあたって、上記の①の「条件を整えること」 ②の「意欲と活動の重視」が解明される必要がある。

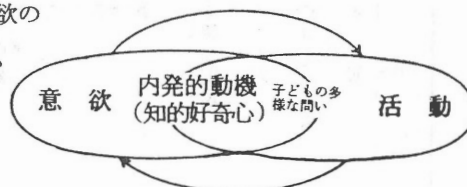
- ① ①の「条件を整えること」については、社会化を進めるにあたっての個別化の考えである。答申にある「国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し…」とある通りであり、社会化の過程において、この人間として生きる基礎・基本がきちんと身につくことが重要であるということである。

しかし、基礎・基本を学びとること、教えることの過程には、能力、特性の質的な差異学習における達成度の差異等の個人差により、身につけ方の指導の改善が図られなければならない。

換言すれば、個別化のための指導の改善が社会化の過程における課題なのである。

- ② また、③の子供の意欲・活動の重視については、個性を重視した学習を展開しようとするればするほど、この意欲と活動を重視しなければならない。香社研が主張する「調べ学習」論は、この「意欲」と「活動」、「基礎・基本」の二つの統一を図る学習論なのである。

子供は、活動によって、意欲を生じ、意欲のふくらみが次の活動を生んでいくのである。



(ウ) 調べ学習は、調べ方法の類型及び、調べ学習（調べ方法と表現方法の組み合わせ）で練られる思考力については、右の表の通りである。

(3) 調べ方法の4類型

① 調べ方法の類型と、それに基づく表現方法を生かした学習

調べ学習は、調べ方法と表現方法の学び方の類型を考えることによって、より具体的に、そして、より意味のある学習を展開しようと試みた。

この類型を設定するにあたっては、思考の類型を分析し、授業実践を通して、特質を明らかにした。次のページの表が、調べ方法の4つの類型である。

4	3	2	1	調べ方法
ひらめき調べ	論理調べ	思い出し調べ	実物調べ	おもな特質・特色
意図的な調べでは解決できず、新しい発想から、とびこませるものがないかの調べであり、事実と事実との間を埋めるものをつかむ。 〈調べ問題の基本型〉 ……別の点からさぐる	「つまり」「つまり」と調べる側の論理に基づく調べであり、事実間や背景とのつながりをつかむ。 〈調べ問題の基本型〉 ……つながりを調べよう	意図的・目的的な調べであり、事実間に関連がなく、調べる意図・目的にあった事実をつかむ。 〈調べ問題の基本型〉 ……さがしてみよう	生の現場で、実物に当たる調べであり、観察・見学・体験により感覚的・体感的に事実をつかむ。 〈調べ問題の基本型〉 ……実物にあたろう	
事象 学習者	事象 学習者	事象 学習者	事象 学習者	図 化

調べ方法の4類型

② 思考の類型

思考の高まりは、「調べ方法」により、調べていく過程にもあり、調べたことを表現する仕方、表現したものに働きかけて調べる中にもある。子供たちの思考は、どこで、どのように成立するのか、また、どう思考の高まりが期待できるのか、考えておく必要がある。思考の類型としては、類別、関係、条件思考をそのパターンとしてあげる。

2. 個性を生かし、基礎基本を大切に作る

(1) 基礎基本の重視と個性の伸長

基礎基本の指導の徹底ということでは、これまでは、すべての児童に同じ知識、能力、態度、を一様に身に付けさせることと考えていた。

基礎的基本的内容は、社会の構成員が共通に習得することが必要な文化である。しかし、それが一人一人の児童の内に血肉化された時、基礎的基本の知識と能力は、個性的で多様なものとならざるをえないのである。

すべての児童に基礎基本をまず習得させ、その上で個性をのばすという考え方がこれまで一般的であった。しかし、基礎的基本の内容を確実に身に付け、これを生かしながら社会の変化に主体的に対応できるものとなるためには、基礎基本を習得する過程そのものの中で個性を生かすように努めなければならない。さらに、それを基盤として一人一人が自分の個性を生かしながら、学習していくことのできるよう指導し、援助することが、今後の学校教育が目指すべき方向となるのである。

(2) 人間形成としての基礎基本をとらえる

基礎基本というと「基礎学力」に直結させてとらえがちであり、教科の教育内容にのみかかわった用語として受けとめられがちであるが、その奥底では、人間形成と深くかかわっているのである。授業の目的は、単に教科内容の基礎基本を伝授することにとどまらず、それを通して人間形成を図ることである。

学校教育は、人間の一生を通じ、成長と発達の基礎を培うものであるから知育のみに片寄らず、徳育、体育の全面にわたって調和のとれた人間性豊かな児童の育成を図るように基礎基本の徹底に努めなければならない。「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」「いかに生きるのか」の基礎基本が問われているのである。

さらに、「基礎的基本的内容」については、これまでの考え方、とらえ方が今日の教育状況にそぐわなくなり、新しい内容を盛り込む必要が生じてきたことにも目を向けていかねばならない。

(3) 基礎基本と個性のとらえ方

前述したように、「基礎基本を身に付けること」と「個性を生かす」ということを対立的にあるいは矛盾的にとらえるのではなく、基礎基本の充実と個性を生かす教育を同時に進め、「個性を生かすための基礎基本」という考え方をとらなければならない。基礎基本を人間形

成の基礎基本としてとらえるという視点に立つとき、それはとりもなおさず、個性の伸長ということにつながる。

「国民として必要とされる基礎基本」という表現にみられるように、共通的、一般的であるとするのとらえかたがあるが、すべて、基礎基本が共通にあるのではない。一人一人の人間の成長、発達過程において、その人独自に形成されるべき基礎基本がある。

基礎基本を一人一人の子どもに組なおして、主体的に表現したものが、個性であり、基礎基本は個性的、個別的であると考えることが大切である。

基礎基本を大切にするためにも個性をどう生かしていくか、と同時に子どものもっている「よさ」をどのように生かしていくかが問われてくるのである。

2. 社会科学習における基礎・基本とは

(1) 基礎・基本重視の背景

基礎・基本の修得は、個性の伸長（自己実現）と連動している。臨教審二次答申の「生涯にわたり積極的に自己実現を図るための基礎・基本の修得」、「人間形成の基礎を培うために必要な基礎的・基本的な内容の修得の徹底を図ると共に、社会の変化や発展の中で自ら主体的に学ぶ、意志、態度、能力等の自己教育力の育成を図る」は、教課審の教育課程の基準改善の原点となっている。

この背景に、情報化、国際化、技術化する21世紀に生きる子供たちに必要な、創造力・思考力・判断力を育成する基盤は、基礎・基本の徹底にあると考える。

(2) 基礎・基本とは、

(ア) 基礎的・基本的内容について

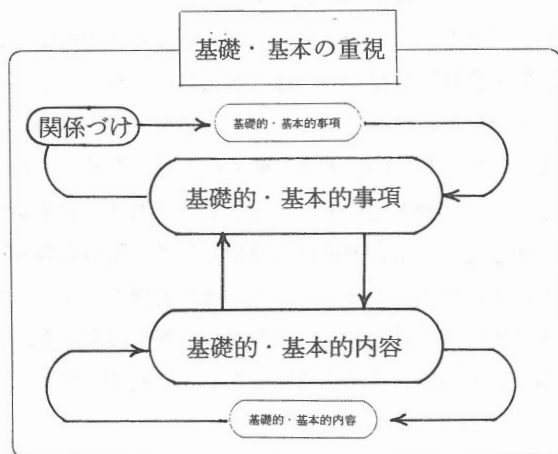
基礎的・基本的内容とは、具体を離れた抽象であるとか、個別を超えた普通であるとかいった「概念」ではないのである。基礎的・基本的内容とは、具体の中に生きて働いているもの、個別の事例の中にある生きて働いているものである。

このようなことから、身につけていく基礎・基本の内容を明確にすることが主要になってくる。そして、基礎的・基本的内容を学んでいくには、当然基礎的事項を踏まえることが肝要である。例えて言えば、新しい工業の学習において、IC産業を取り上げたとしよう。この学習の基礎的・基本的内容は、「新しいIC工業は、従来の大都市や臨海に工業があったが、新しい工業においては、水、交通、人材などの条件が満たされれば、内陸部に工業立地が可能となる」である。この内容をとらえるには、どうしても大都市中心、臨海中心ということで、大阪、東京、尼崎、北九州等、またこの歴史を見ると鉄工業を中心とした、明治の施策がさらに社会的現象としては、鉄鋼業からIC工業へと工業が転換していること等を踏まえないと内容をとらえることはできない。

内容をとらえていく調べ学習は、決して、基礎的事項をおろそかにしてはならない。かと言って、基礎的事項を単なる用語として知識として覚える学習であってはならない。

用語と用語を関係づける力、基礎的事項を使っていく力、この基礎的事項を使える人間、すなわち、概念、傾向性として内容をとらえる力を大切にしなければならないと考える。

ここに、生涯に渡って、学び続ける力が培われてくるのである。（生きて働く基礎・基本）



ここで、基礎と基本の考え方について触れておく。基礎・基本はいろいろな立場で考えられるが、「基礎とは時間的な流れの中で次の学習に発展する前提として修得するもの、基本とは内容の中での本質的な要素及び全体構造の要となるもの」と考えたい。このことより、基本とは「その教科、単元の中核となるもの」、基礎とは「基本となるものを外から支えているもの」と区別する。

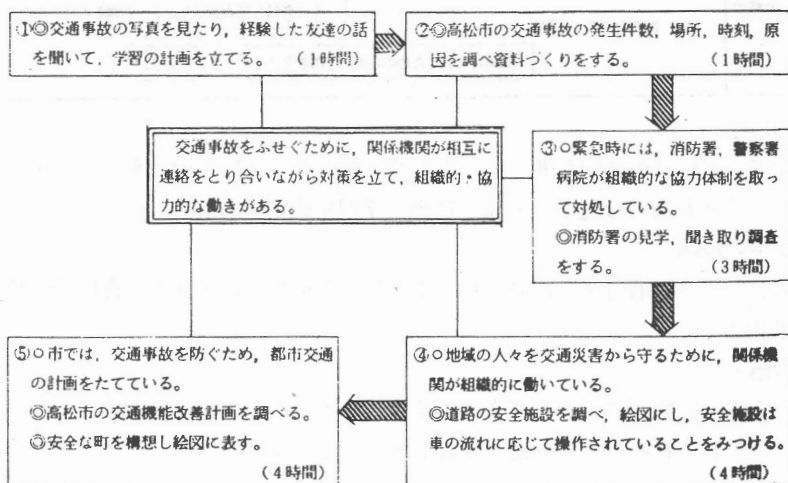
(イ) 基礎的・基本的な能力について

基礎的・基本的内容を含む一定の教材により、学習が展開されるわけであるが、学び方を学ぶ過程としての調べ学習においては、実物調べや表現を通してつかみ取ってくる能力も基礎・基本なのである。

そして、この基礎的・基本的内容（地理、歴史、公民）や様々な能力は、子供の成長、発達によって生成、発展等されるものであり、その系統は明らかにしておかねばならない。

単元を通して 4年「交通事故をふせぐ」

<単元構成（交通事故をふせぐ） 13時間>



- 基本 □ 基礎
- の中の
- 学習の流れ
- ◎ 基礎・基本の能力
- 基礎・基本の内容

(3) 指導過程を明確にし、基礎・基本の徹底を図る。

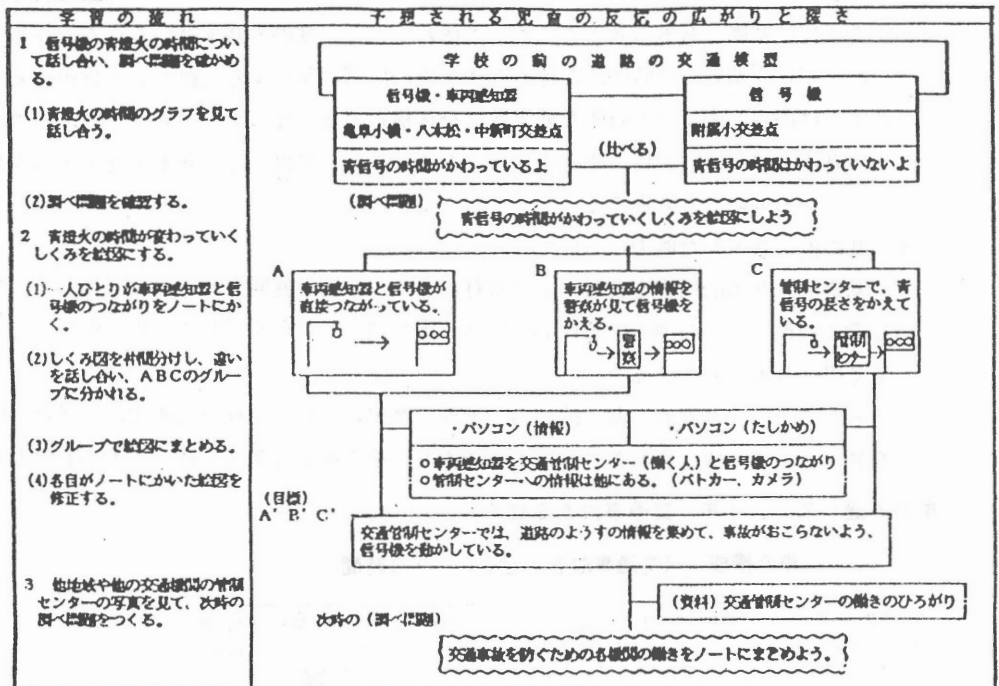
基礎・基本の徹底を図るために、調べ学習の指導過程を明確にすることである。「調べ学習」は、子どもの思考と表現を重視するわけであるが、それが、子どものなすがままの調べであり、表現したことの発表であってはならない。基礎・基本の内容をどう身につけていくのか、そこでどんな学ぶ力としての思考力が働くのかを、明確にした調べ学習でなければならない。当然 こととして、個人差に応じた学習をどう取り入れるかも考えなければならない。そうしたことを明確にした学習の流れの典型として、指導過程を明らかにすることが、基礎・基本の徹底のために重要である。そこで、その過程を、Ⅰ. 「調べ問題」設定の段階、Ⅱ. 個（グループ）の調べの段階、Ⅲ. 自他の交流を図る段階、Ⅳ. 個別化・個性化を図る段階、Ⅴ. 一定のねらい・価値を達成する段階とおき、展開していくのである。

本時の学習

(1) 児童の取り組み内容

信号機と車両感知器をつないで、交通管制センターを見つけ、人間の組織的な働きを調査にまとめる。

(2) 学習指導過程



(ア) 「調べ問題」設定の段階

前時とのつながりの中で、青信号の時間が変わっているものと変わっていないものとをグラフ化しておき、この2つの違いから子どもの多様な問いをもとに調べ学習を設定する。

(イ) 個（グループ）の調べの段階

調べ問題について一人ひとりが、前時までに調べをしてきたことをもとにノートに青信号の時間が変わっていくしるみを予想する。

(ウ) 自他の交流を図る段階

一人ひとりがノートに表現した絵図の中から代表的なものを抽出することによって3つの反応があることを知る。さらに、それぞれの反応の根拠を発表しあうことにより、自分と違う考えの良さ

に気づく。

(㉔) 個別化・個性化を図る段階

それぞれの反応ごとのグループに分かれて調べる際に、それぞれのグループの考えの深さの度合いにより、情報を得るためのパソコン、確かめを行うためのパソコンと、援助の仕方を工夫する。

(㉕) 一定のねらい・価値を達成する段階

車両感知器、信号機、交通管制センターのしくみを概念としてとらえ、「人」が「情報を集め」「情報を整理する」「情報を流す」という基礎・基本の用語を関係づけて、とらえる。

このように、調べ学習では、1時間の学習の指導過程の中でまた、観察（実物調べ）→表現→観察（実物調べ）といった、連続的活動によって学習が進む中で、基礎・基本の内容や能力が身についていくのである。

(4) 学び方における基礎・基本

調べ学習を実践する上で、私たちは常に子供の活動を中心にすえた学習展開を考えてきた。子供一人ひとりの学ぶ意欲を大切に、自ら学び方を学ぶ積極的な子供づくりを目指している。

ここで調べ学習の特質について再確認しておくこととする。

社会科「調べ学習」とは、子どもの一人立ちを願い、発達課題を踏まえ、学習意欲を重視し、「調べ方法」「表現方法」の組み合わせにより、社会を見ていく学び方の確立を図る学習である。

さらに、学び方の確立を図る調べ学習の成立要因を述べる。

- ① 子供の発達課題を踏まえた学習
- ② 調べ方法の類型と、それに基づいて表現方法を生かした学習
- ③ 真の学習の問題となる「調べ問題」を設定した学習
- ④ つまづきの手立てを表現した評価

四年単元「香東川の開発」を例に

(㍿) 手足でかせぐ歴史学習の学び方

基礎・基本の学習は、基礎的・基本的内容についてきちんと学んでいく学習、そして学び方を学んでいく学習である。本単元の設定にあたっては、単元の基礎・基本を明確にし、内容の精選を図り、時間を十分に確保することによって、歴史の学び方を自ら体験する学習を何より重視したいと考えた。

そこで、本単元では、360年程前に行われ、つけかえ工事以前の古い川筋を探る中から工事の偉大さ、先人の願いや苦勞にせまらせることにした。古い川筋については、諸説があり、その痕跡も限られている。しかし、これらの情報や事実を自ら探り選び、自分たち

の手足や耳、目を使った科学的な手法を用いた調べ学習に徹した。科学的論理性と推論に基づき、調べたいという強烈な意欲をもち、自らが計画し、実行してまとめているような学習をねらった。

(1) 学ぶ力としての調べ方法と表現方法

古い川筋の跡をつかむため、まず、学校の近くの井戸、ポーリング会社、古い寺や神社、栗林公園、工事現場等に出かけ、聞きとり、観察、計測、土掘りといった体験活動（史物調べ）を通して調べていった。

これらの史物調べで得た情報をグループ内で交換し、簡単な模型を作ったり、絵カードに書いたりして絵地図にはりこんでいった。このようにして点と点が結ばれ、中流部分と下流部分の川筋が明らかになった。

しかし、どうしても調べられない部分（中流と下流の中間部）は古い地図をもとに、ため池や川原跡を手がかりに地形をたどりながら類推していく方法をとった（ひらめき調べ）。

ここで学ぶ力として、能力の中核となる表現について考えてみることにする。

調べと表現とは、常に相互に作用しながら行なわれるものである。また、その表現であるが、模倣に終わってはいけないのである。表現は事実と共に、事実と事実、事実と自分の考えをつなぐものであり、自分なりの考えを重視するところに意味がある。黒板の資料を見て、言語で発表するのも表現であろうが、より大切なことは、自分の考えを文や絵や図に表してみる、表現してみる中で、論理力や創造力を育てていくことである。このことは、当然のことながら、個人の表現の場合だけでなく、グループの表現についても言えることである。また、表現したものを操作・再構成することによって思考が深まり、基礎・基本にせまっているものとも考える。

ここでは、表現方法として絵地図作り、

野外調査で見つけた昔の香東川の痕跡を地図の中に書きこみ、絵地図を作る。
(事実に基づいたもの)



調べ方法として、ひらめき調べ

川の痕跡を見つけた地点をつないで、昔の川の流れを構想する、より確かな痕跡がないか探っていく。

ここに、思考操作としての構想思考（創造的な思考であり、事実を組み立てながら、見えないものを発見したり、全体像を描いていく思考）が力として練られるのである。

社会科の改訂の基本的な考え方

小学校社会科の改善に当たっては、教育課程審議会の答申に示された改善の基本的なねらいの趣旨を踏まえ、次に示す三つの観点を重視して改善を図っている。

- ① 国際化や産業構造の変化など社会の変化を考慮して、国際社会に生きる日本人として必要な資質を養うことを一層重視すること。
- ② 我が国の文化と伝統を尊重するとともに、世界と日本とのかかわりについて理解を深めるようにすること。
- ③ 基礎・基本を重視して内容の精選を図るとともに、知識中心の学習に偏ったりしないように活動や体験を重視した学習活動が展開できるようにすること。

この三つの観点を重視して改善を図っている。

まず第一番目についてみると、国際化、産業構造の変化というような社会の変化を考えて、社会科として、今後、国際社会に生きる日本人として必要な資質を養うことをより一層重視し、そのねらいを達成できるような教育ができるように改める必要があるということで内容の改善を図っている。

第二番目についてみると、文化・伝統の尊重及び国際理解については、答申の教育課程の基準の改善(4)に強調されていることであるが、小学校の社会科においては、将来とも我が国の文化と伝統を尊重したり、世界と日本とのかかわりについて関心を深めることができるようにする内容に改めている。

第三番目についてみてみますと、第3学年から位置付けられる社会科の内容については、内容の精選を図り、共通に学ばせる基礎的・基本的な内容を明確にしました。と同時に、社会科についてはどうしても知識注入の、しかも知識暗記主義の学習に偏るとということが指摘されたこともあり、また子どもの興味・関心を育てるということからも、学習活動において活動や体験が重視されるように内容の改訂を図っている。

この三つの方針に基づいて小学校の社会科の改訂を図っているのである。

新指導要領と低(生活科)、中、高指導内容の視点

調べ学習の実践 ― 内容と方法の統一をめざして ― を追求する上で、大きな課題は、社会科学習内容と子供の活動をつなぐ教材の価値を何に求めるかである。従来の教科書の内容を教え込む知識注入の学習から、子供自ら体験し、表現する学習を通して、社会の中で生きぬく人間の姿や願いをとらえていく学習へと、改善していかなければならない。

社会の動向・変化の中で、教材を分析し、指導の重点を見つける視点として、

Ⅰ＜低学年＞……生活科の視点

Ⅱ＜中学年＞……地域をみる視点

Ⅲ＜高学年＞……国際化、情報化、技術革新の視点

があげられる。これらの視点を指導要領の改定の方とあわせてみていくことにする。

① 生活科

教育課程審議会は、生活科について、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせると共に、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養うことをねらいとする」と、その趣旨やねらいを明確に述べている。

すなわち、具体的な体験や活動を通して社会認識や自然認識の芽を育てると共に、個人として社会人として生活に営む基礎的な資質を身につけさせる教科である。

新教科「生活科」を構想するに当たっての基本となる考え方は、未分化の低学年児童の発達特性を考え、子供の生活体験を基盤に、「学ぶ意欲」と「体験・表現活動」を重視した、人間としての生き方を学ぶ学習でなければならないということである。そこで、「生活科」の学習においては、特に、次の三点を重視する。

(ア) 子供の「学ぶ意欲」を重視した、体験・表現の学習

従来の社会科や理科の学習で陥りがちな表面的な知識の伝達を反省し、子供の生活体験を基盤に、子供の活動を重視した体験的な学習や総合的な学習を展開したい。「作物の栽培」「買い物体験」等の体験活動や「模型づくり」「劇づくり」等の表現活動を軸に学習を展開することによって、学習意欲の喚起、豊かな心の育成、実践力・問題解決力の育成など、これからの社会に生きる子供に必要な資質を養うことができる。

(イ) 自己認識の芽を育て、自己確立を図る学習

これまでの社会科や理科の学習においては、取り上げる事象を客体としてとらえてきた。即ち、「働く人の工夫は〇〇だ」と社会のしくみや人間の働きを冷めた目で理解させた。生活科の学習では、子供と事象との関わりを大切にしたい。子供が、自分との関わりにおいて社会的事象や自然事象をとらえていくことを大切にしたい。

即ち、そのことは、単に社会的意味や自然の法則の認識に終わらず、「社会規範」や「自然のルール」を取り上げ、自分との関わり、更に、自分の在り方までを追究させたい。ここに、自己認識の芽を育て、自己確立を図る学習が可能となるのである。

(ウ) 子供の個性や特性を認め、伸ばす学習

生活科の学習においては、子供の体験や表現活動を大切にすることは先に述べた通りである。この体験や表現活動、例えば、「野菜を育てる」「駅の模型をつくる」といった活動の中で、一人ひとりの子供の個性や特性を発揮できる。

即ち、その子らしいアイデアや工夫が見られ、また、相手を思いやる心や創造的な思考を働かせながら、体験・表現活動が進められるわけである。このように、子供の活動を重視する生活科の学習では、一人ひとりの子供の良さを生かし、伸ばすことができるのである。

目標の示し方は、社会との関わり、自然との関わり、活動形態の別に3項目を設けている。

- ① 自分と学校、家庭、近所などの人々や公共物とのかかわりに関心を持ち、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動することができるようにさせる。
- ② 自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心を持ち、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにさせる。
- ③ 身近な社会や自然を観察したり、動植物を育てたり、遊びや生活に使うものを作ったりなどして活動の楽しさを味わわせ、それを言葉、絵、動作、劇化などにより表現させる。

内容については、

—— 第1学年では、 ——

- ① 学校とその周辺の様子、そこにいる友だちや学校生活を支える人々
- ② 家庭の人々と自分の役割
- ③ 公共施設の利用と身近な自然の観察
- ④ 自絶のものを使った遊び
- ⑤ 生き物を育てる
- ⑥ 入学してからの自分

—— 第2学年では、 ——

- ① 近所の人々と自分の生活とのかかわり、コミュニケーション
- ② 乗物などの公共物の正しい利用
- ③ 季節や天候の変化と生活とのかかわり
- ④ 自然の材料などを使った遊びや生活で使うものの製作
- ⑤ 野外の自然観察や生き物を育て親しみをもつ
- ⑥ 生まれてから現在までの自分

上記の内容については、学年別に示すが、その扱いは学年順によらないこともできる方向を「内容の取り扱い」に示している。

自然や社会との関わりでは、対象を客観的に知るだけでなく、生き物や公共物を大切にするとか、季節に合わせた生活をするなどと、行動の主体となる活動を盛り込んでいるのが特色となっている。

生まれてからの自分についての学習でも、成長を支えてくれた人々に感謝し、意欲的に生活するという、生活目標的な内容を含ませている点でも特徴がある。

(7) 生活科実践上の課題

- ㊦ 活動の中に豊かな内容を求めて

現在、多くの生活科の学習をみると、具体的な活動や体験の重視、人間としての基礎的な資質の育成が強調されるあまりに、学習活動の工夫、改善の研究が先行し、学習を通して、子供はどんな力を身に付けることができたのか、また、子供がどう高まったのかが明確でない実践も多いようである。

店で働く人を調べ、働く人や利用する人の工夫、努力や願いを発見することによって、はじめて自分はどうするかという社会人としての自分のあり方についての問いかけが生まれてくるのである。科学的思考の乏しい活動は決して学習として成立し得ない。

生活科の学習を考えるに当たっては、社会認識や自然認識をどう踏まえるかという内容研究が欠かせない。科学的思考を踏まえない行動は、単なる遊びや教師のしつけに終わるのである。真に科学的な認識を土台にした値打ちのある活動かどうかみきわめることが重要になってくる。

① 体験、表現活動を単元展開の中に

従来の社会科や理科の学習はどちらかといえば、表面的知識の伝達に陥りがちであった。生活科の学習では、こうした反省に立ち、子供の生活経験を大切にし子供の活動を重視した体験的学習や総合的学習を展開したい。

子供の意欲に満ちた主体的な活動を進めるために

- ① 活動の時間を十分に確保すること
- ② 活動の目的が明確であること
- ③ 活動そのものに魅力があること
- ④ 活動相互の連続性を図ること

を考慮しながら単元構成をすることが重要である。

⑦ 子供の個性を認め、伸ばす活動を求めて

生活科の学習では、子供の体験活動や表現活動を大切にしたい。それは、体験、表現活動の中で一人ひとりの子供の個性やその子なりのよさが認められ、伸ばされると考えるからである。

生活科の学習では、子供の創意工夫やアイディア、想像力が十分に引き出せる夢のある活動や創造的活動を取りあげ、子供にこうした力を発揮させていくことが大切である。

⑧ 地域の特性を生かした生活科のプラン作り

② 地域学習

生活科が新設され、社会科は第3学年から始まるのであるが、その改善にあたって生活科との関連を図っていかなければならない。

- その一つは、取り上げる社会科の内容的側面において、生活科との関連を考慮することである。
- その二つは、学習活動の在り方等、方法的側面において生活科との関連を図ることである。

前者については、中学年の地域学習において、地域の人々と自分とのかかわりや地域の人々の協力の様子などが取り上げられなければならない。このことは、第3学年の第一単元の内容に求められ、例えば、公共施設の利用、地域社会における清掃や交通安全等の活動への参加等、地域社会にみられる人々の協力の様子を取り上げ、それと自分との関わりを考えさせることが求められるのである。

後者については、生活科が重視している、見る、調べる、作る、探す、表現する等の活動を社会科でもより一層重視している。

3年生は、生活科とのつながりを特に重視しなければならない。自分の身近な地域の観察や見学など体験が重要である。ここでは社会事象をまず、じっくりと見る目を養っていききたい。また、様々な疑問を持つことも大切である。そして、調べ問題を設定して自分の問いに従って意欲的に調べることが望まれる。見たことを半具体に表現しながら社会的意味を見つけていくのである。

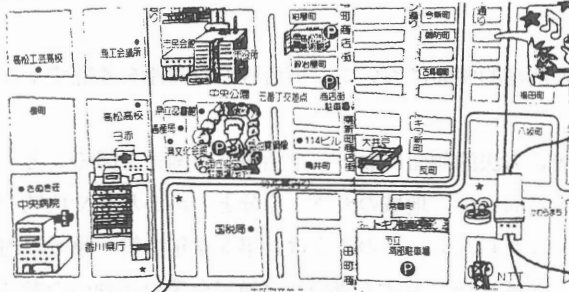
第3学年社会科導入単元の工夫

「私たちの町の絵地図づくり」の単元は、「町の人の仕事の絵図をつくろう」、「市民会館と同じ働きをする施設の発見」、「絵地図の中の仕事を分け、調べる計画を立てる」という3つの小単元から構成される。「町の人の仕事の絵図をつくろう」の学習において、生活科で学習した学校や公園、駅等の絵図を活用する。こうした施設と市民会館を比べ、その違いや共通するところに気づき、市の施設や人の仕事の仲間分けへと学習が発展する。つまり、市民会館も中央公園も公共の施設であるという認識である。生活科を社会科へと無理なく発展させるためには、社会認識が点から線へとつながるようにしなければならない。

さらに、生活科では、直観的思考を重視したのに対し、3年社会科では論理的思考を重視することから見て、導入単元の工夫は重要である。

〈子どもの意識の流れ〉

〈私たちの町の絵図〉



本時の課題

市民会館と中央公園とを比べ共通点を見つけよう

何と何を比べたらいいのかな

← 人や施設を比べたらいいよ

〔教材性(課題性, 思考の因子, 個性)を持つ子ども〕

〈比べる〉

人のようすやその人の目的, 施設を比べて調べよう

〈学び合い〉

人のようす

子供, 大人, お年寄りいろいろな年齢の人が利用しているので, 同じだな

人の目的

勉強と遊びとなので, 違うよ

施設

建物と広場なので, 違うのかな

〈つなぐ〉

市民会館と中央公園は, 子どもから, 大人, お年寄りいろいろな年齢の人が利用するところが共通点なんだ

← 市が2つの施設をつくったという資料

(教師の出番)

みんなで利用するということ, 市がつくったということがいっしょなんだ

私たちの町の絵地図にある施設の中で, みんなで使う市がつくった施設にシールをはろう

次時の課題

町の絵地図の中で残った施設の仲間分けを考えよう

〈教師の援助活動〉

- 生活科で学習したことを絵地図に表現しておき, その絵地図をもっと詳しくしようということで市民会館の調べをさせておく。
- 2つの施設の, 人のようす・人の目的・施設を比べるという思考の因子を持つ子どもの考えに学ばせ, 論理的思考へと発展させる。
- 教材性(思考の因子)を持つ子どもに質問したり, 3つの観点で資料を調べることにより, 2つの施設の共通点を見つけさせ, 点としての認識を線へと発展させる。
- 2つの施設の共通点である公共性の認識を理解させるために, 市がつくった施設であることを補説し, 新しい観点の投入とする。
- 市民会館, 中央公園が公共の施設であることに気づかせ, その特徴をノートにまとめさせる。
- 市民会館のような公共の施設でないものを, どう仲間分けするかを考えることを助言し, 3年の学習計画をたてる方向づけをする。

高学年の歴史的内容の学習—— 歴史的学习の基本構想

① 小学校歴史学習の3視点

(ア) 香社研では、調べ学習論を土台にして、自ら学び、学び方・生き方を学ぶ学習を展開してきている。この究極にあるものは、自らが考え、正しく判断して行動ができるという人間としての生き方の基盤を養っていくということである。

その時代に生きた人間の生き方、発想や対応の仕方を子供たち自らの現代、そして未来に生きる力の糧として養いたいのである。

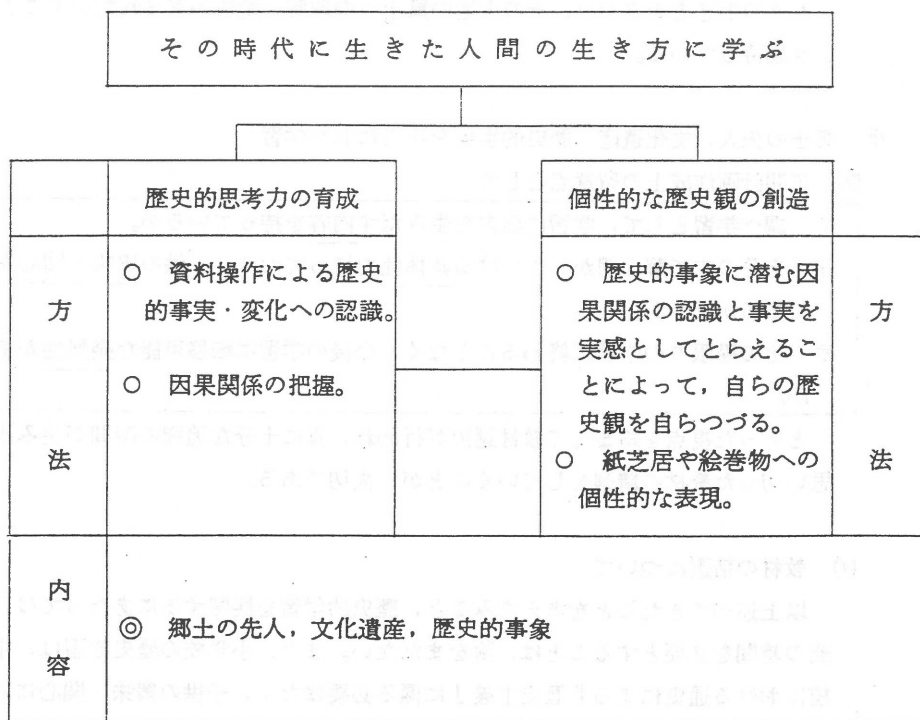
以上のようなことから、香社研では、小学校の歴史学習を「その時代に生きた人間の生き方に学ぶ」という理念において構築しようと考えた。

- ① 郷土の先人、文化遺産、歴史的事象に根を置いた学習。
- ② 変化の意識、因果の意識を持つ中で、歴史的事象を関係づけてとらえる学習。
- ③ 子供の個性を生かした調べや表現を重視し、歴史的事象の羅列に終わることなく、歴史を自らつづり表現する学習。

の3点である。

これらの3つの要件は、決して単独に存在するわけではない。1つの単位においておたがいが密接にからみ合い、1つの流れとして、その学習『その時代に生きた人間の生き方に学ぶ』という理念に導いていく。

これを図式化すると、



この歴史学習においての究極の概念は、「その時代に生きた人間の生き方に学ぶ」ということにあると考える。

そこで、

ア その人物なり、文化遺産を学ぶことによって、その時代背景、人々のくらしや願いを共感的に考察することができるもの。更に、歴史の進展にかかわる人物への認識を深められるもの。

イ 言葉だけの、あるいは言葉を主とする論理的な追究のみに陥ることなく、歴史上に生きた人間の姿をさぐれるもの。また、具体的な事物を目の前にした、実感を伴う学習を展開できるもの。

ウ 方法的な側面からだけでなく、内容的にも転移力のある、歴史の見方・考え方を育む教材であること。そのため、時代を代表し、その時代背景を色濃く見せる、人物なり、文化遺産、歴史事象であること。

と述べることができよう。

(イ) 地域素材の教材化について

このように考えてくると、郷土の先人や文化遺産などの地域素材を教材として導入することの意義も自ら理解できよう。先に述べたア、イ、ウは、地域教材においては、よりその意義・価値が高まってくる。

そこで、中央史と地方史とを関連づけてとらえていくことによって、その時代に生きた人々の生き方をさぐり、その土地の風土への理解・愛情が育まれていくことができるよう期待している。

② 郷土の先人、文化遺産、歴史的事象を中心にした学習

(ア) 年間計画作成上の留意点として

ア 調べ学習として、学習に活力を生みだす内容を持っているか。

イ 自分の力で解き明かしていける具体性を持っており、子供の興味・関心をひくものであるかどうか。

ウ その場限りの学習に終わることなく、今後の学習に転移可能な発展性があるかどうか。

といった視点を踏まえて教材選択が行われ、真に十分な追究の時間が生み出せるよう、思い切った教材の精選をしていくことが、大切である。

(イ) 教材の精選について

以上述べてきたことを考えてみると、歴史的学习を展開するにあたっては、十分な追究の時間を必要とすることは、論をまたない。また、小学校の歴史学習は、中・高等学校における通史による『歴史主義』に偏る必要はなく、子供の興味・関心に応じた、歴史の見方・考え方を養うことに力点を置くことも多くの意見として述べられている。

更にまた、『その時代に生きた人間の生き方に学ぶ』ことに意義があるとは最初に述べた通りである。このような点を考慮してみると、思い切った教材の精選が可能であり、かつ必要であることは言うまでもなからう。

③ 変化の意識、因果の意識を持つ中で、歴史的な事象を関係づけてとらえるとは、

人物の働きや文化の動向・特色はややもすると、事項の羅列に陥りがちである。歴史上の人物が時代のどのような課題に対応して生きたか、各時代の文化の特色を生み出した背景は何かなど、時代的背景との関連を総合的にとらえさせることが、歴史の見方、考え方を育てる上で、不可欠であり、学習の深まりを生み出すものと考えられる。

人物・文化遺産・歴史的な事象などを素材としながら、それらが『当時の世の中において果たした意味や役割』について考察する。言いかえると、歴史像をいかに組み立てるかという思考操作の活動の大切さをここでは述べたい。

④ 子供の個性を生かした調べや表現を重視し、歴史的な事象の羅列に終わることなく歴史を自らつづり表現する学習とは――

ここでは、歴史的素材を基盤にし、そこに歴史的思考、特に因果思考を加えたものを、いかに自らの歴史観として、個性的に表現するかということを問題としよう。

ただ、「その子なり」「個性を生かしたとらえ方」という述べ方をしても、子供たちの歴史把握や意見は、史実や資料に基づいて吟味され、根拠あるものに鍛えられている必要があることは、言うまでもない。このことについては、前項で既に述べた通りである。

しかし、歴史的な事象はその特性からして、子供たちが追体験したり、実験ができにくい以上、自ら選んだ範囲内の史料（文章・映像・文化財）という根拠に基づいて自分なりに事象と事象を関連づけ、その時代のイメージを持つという述べ方に異論はなからう。なぜなら、これが、“歴史を学ぶ”ことの本質と考えられるからである。

6年は、歴史学習において、具体的な見学ができない場合が多く、言語による論証が中心となる。基礎・基本の事項や用語をつないで自分なりの論を組み立てていくことが求められる。ここでは、変化の意識、因果の意識を持つなかで歴史的な事象を関係づけてとらえることが大切である。また、歴史的な遺物や文化遺産、人物を見ていくことで、その時代の全体像を描いたり、見えないものを発見するといった構想力が求められる。そして、6年では、問う力とともに論証の因子を操作しながら論を組み立てる学習が中心となる。

〔表現について〕

個性的な調べに伴う表現の仕方はまた個性的である。歴史学習においては、いくつかの実践で述べたように、紙芝居あるいは絵まきもの、関係図による表現の形態をもって、学習を組み立てている。表現の内容については、個性的ではあるが、絵まきもの、紙芝居、関係図など、変化の意識、あるいは因果の意識を練ることのできやすい表現の形態を選んでいることを最後につけ加えておく。

以上、香社研の歴史学習の基本構想を「その時代に生きた人々の生き方に学ぶ」という理念と、それを支える3つの要件

- ① 郷土の先人、文化遺産、歴史的事象に根を置く学習
- ② 変化の意識、因果の意識を持つ中で、歴史的事象を関係づけてとらえる学習
- ③ 子供の個性を生かした調べや表現を重視し、歴史的事象の羅列に終わることない歴史学習

をもって述べてきた。

最初にも記したように、この①②③は常に融け合い、私たちの目指す学習を推進する原動力となるものである。

このような学習を通して、過去に生きた人々の願いや苦しみ、努力に思いをはせ、これから力強く生きていく子供となるよう願い、人間形成をはかっていきたいと考える。

ここで、新学習指導要領に例示されている42名の人物の中から、本居宣長を取り上げ、その人物の生き方に学び、自ら歴史を綴っていく学習事例について述べていく。

1. 問い方を学ぶ

子どもたちは、本居宣長の調べを通して、「35年の年月をかけて、古事記伝を完成させた、宣長って、どんな人だろう」、「一揆や打ちこわして何だろう」「どうして、そのようなことがおこったのだろう」といった素朴な疑問から、「本居宣長」への調べは始まる。当時のできごと、当時の人々の考えなどの調べに裏づけられて、個のもつ疑問は、少しずつ、自分なりの論理のある問いへと深まっていく。

問いを交流する過程で、「きっとその当時は大変なことがおこっていたのだろう」「一体どのようなことが人々の考えにあったのだろうか」と、共通の調べ問題へと発展していくのである。

この問題に対し、一人ひとりの子どもたちの頭の中には「百姓一揆と関係あるかもしれない」「当時の儒学の影響があるのかもしれない」などと、見通しを立てていくのである。この見通しをもとに、調べたことを組み立てながら、当時の時代像を組み立てていくのである。つまり、この調べ問題は、子どもたちの調べの中から出てきた問いの集合であり、基礎・基本となる内容へ

とつながりをもったものとなっているのである。

このように、子どもに、「なぜ」「どうして」「きっと」「その理由は」という疑問を起こさせ、教えたいものに向かって子どもの頭の中から、手が伸びてくるようにすれば意欲が生まれてくる。この意欲が主体性を生むのである。疑問こそ学習活動の原動力となるのである。問いを教える授業は、記憶、受容能力でなく、「問題の自己提起能力」を鍛えていくのである。ここに、自問自答的な自己活動が起ってくるのである。

2. 感情と認識の一体化

グループごとに宣長と真淵の会話を吹き出しの形で紙芝居につけ加えていくと、子どもたちは、当時の幕府に対する考え、宣長の人がらからの共感等、様々なことを自分の感情を教材の中に入れながら、同一化していくのである。ここに学習を通して感情と認識が一体化されてくる。

感情は認識と表裏一体の関係をなして、豊かな人格を育てる働きをする。すなわち、認識は物や人についての「構造」をつかませるがそれがどういう価値を持っているのか、そこから出発して、自分はこれからどうしたらいいのかという行動への起爆力となるのは、認識ではなく感情である。行動をおこす実践は感情の役割である。また、感情は認識を助け促進する。たとえば、適度の競争心は認識を助け、適度の興奮が感覚をすどくし、認識を助けるのである。そして、このような感情は、深い体験による感動の中に育つのである。豊かな人間関係を持ち、また、様々な生活体験をする中で得た感情体験は、表現活動へのエネルギーとなり、さらに、創造的自己実現活動へと高められるのである。

土庄小学校の研究の取り組み

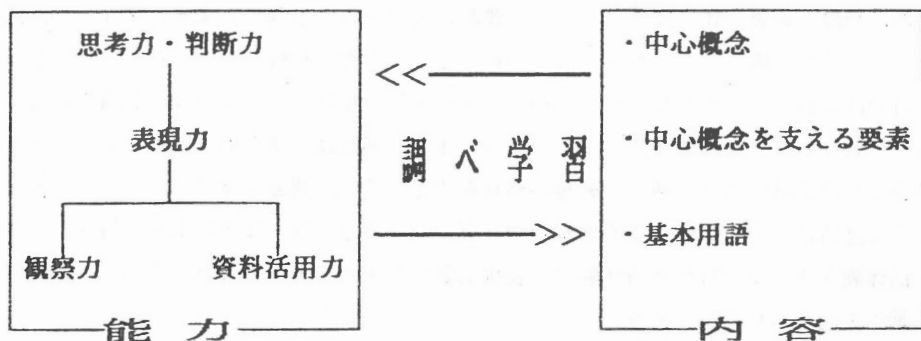
1. 学校教育目標

一人ひとりの子どもをよく見つめ、人間性を高め、
心身共にたくましい実践力のある子どもを育成する。

2. 研究主題・サブテーマ

一人ひとりが主体的に学ぶ学習指導

—— 能力と内容の基礎・基本の定着をめざす社会科学習 ——



3. 研究主題について

(1) 新学習指導要領をうけて

新学習指導要領では、これからの小学校教育においては、「自己教育力の育成および基礎・基本の重視と個性教育の推進」が大きな課題とされている。また、社会科においても、「基礎・基本の重視とともに活動や体験の重視」が述べられている。これらは、本校のめざす「自ら考え主体的に判断し行動できる力を育てる教育」に通じるものである。

(2) 本校の児童の実態から

子どもたちは博識になり興味も多様化しているが、指示待ちの子どももふえている。また、全体の雰囲気にながされやすく、確かな自分の考えを持って、たがいに学び合い高め合っていこうとする姿勢があまりみられない。21世紀の激しい社会情報化社会に生きる子どもたちに、自ら学ぶ意欲と主体的な学習の仕方を身につけさせることが、われわれ教師の使命である。

以上のことから、子どもの意欲や活動を大切にした「一人ひとりが主体的に学ぶ学習指導」を設定した。本年度は、サブテーマにもあるように、社会科（生活科）学習を通して研究主題にせまっていきたい。

4. サブテーマについて

(1) 基礎・基本の考え方 (年間指導計画、単元構成、本時との関連)

単元における「基本」は、その単元の中核となる内容の中心概念と考える。

単元における「基礎」は、基本をつかむための必要な能力や内容と考える。

- ④ 能力の基礎・基本は、観察力、資料活用力、表現力、思考力・判断力と考える。
- ・ 内容の基礎・基本は、中心概念を支える要素や基本用語と考える。

(2) 調べ学習の流れ

子どもの発想を大切に、子どもが学習の見通しを持って意欲的に社会科学習に取り組む姿を求めて、「調べ学習」を実践している。本校の調べ学習は、次のような学習の流れである。

- | | | |
|------------------------------------|--------------------------|---|
| ① 調べる計画(課題提示、個の問い、仲間分け、学習の見通し)を立てる | ----- | 「 |
| ② 調べて表現する | ----- [役割調べ・グループ調べ・一人調べ] | 学 |
| ③ 調べ問題をつくる | ----- [調べ問題のつかませ方] | 習 |
| ④ 調べ問題を追究する | ----- [役割調べ・グループ調べ・一人調べ] | ノ |
| ⑤ 次の調べ問題をつくる | ----- [調べ問題のつかませ方] | ー |
| ○ | ----- | ト |
| ○ 学習をまとめる | ----- | 」 |

== [研究内容とのかかわり] ==

5. 研究内容について

(1) 調べ問題のつかませ方

価値のある調べ問題をつかませるために、子どもの「問題を見つける力」を、どう育てていくか。また、どんな教師の援助活動が必要なのか。

(2) 一人学びの場

子どもの発達段階にあった調べ方(役割調べ・グループ調べ・一人調べ)の実践や表現の質を高めるための工夫を工夫する。

(3) 学習ノートの活用

学んだことを確かなものにするノート、思考を深めるノート、その子らしいノートづくりのための指導は、どうあるべきか。

6. 他の領域での取り組み

- ④ 発見ノート . . . 問題を見つける力を育てるために、日常生活のなかでの驚きや疑問を書かせ、朝の会などで発表させている。
- ④ ドリルの時間 . . . 資料を見る力や表現する力を伸ばすために、1週間に2回、資料の読みとり練習やクロッキーの練習などをさせている。

7. 低学年団（生活科）での実践

- (1) **調べ問題のつかませ方・・・単元の導入で、発問や具体物へのふれさせ方を工夫すれば、興味をもって活動するだろう。**
- ア、1年「アサガオの苗をプレゼント」では、教師がアサガオの悪いプレゼントの仕方を示すことにより、どんな渡し方をすれば相手がアサガオを大事に育ててくれるかを考えさせた。
- イ、2年「自分の店をつくろう」（肉屋）では、児童がこうだと思って作っている肉屋の概念をゆさぶるために、肉の数・種類・値段・働く人の様子などを問うことによって、わからないことが多いということ（店づくりのむずかしさ）に気づかせた。
- (2) **役割調べ・・・役割分担による共同作業を行えば、自分と人とのかかわりを調整する力を養うことができるだろう。**
- ア、1年「夏になって変わってきたものをペープサートで作ろう」では、家での調べ（服そう）（食べ物）（家具・装飾）（動・植物）を役割分担し、友達の調べも同じようにペープサートを作り、グループで話し合いながら、夏の家の模型に取りつける中で、自他とのかかわりを調整する力を育ててきた。
- イ、2年「自分の店をつくろう」では、グループで一つの店をつくる過程において、友達とかかわり合い、話し合いながら進めていく中で、調整する力を育ててきた。
- (3) **学習ノートの活用・・・ねらいをはっきりさせて、絵や文に表現させれば、自分の考えが深まるとともに友達間の交流の手段となるであろう。**
- ア、1年「おうちのしごとおおいよ」では、家族の一日を調べて絵や短冊カードに書いて紹介し合うと、家族の仕事の違いや、どこの家でも家族の世話をする仕事や家計を支える仕事があることに気づいていった。
- イ、2年「自分の店をつくろう」では、店屋の人のいう言葉を短冊カードに書いたり自分の作りたい店を絵にかいたりする中で、わからないことを発見したり、自分と違う考えに気づいたりした。

8. 中学年団での実践

- (1) **調べ問題のつかませ方・・・驚きのある具体的な資料や子どもをゆさぶる発問によって問題意識を高め、グループによる観察・表現活動の中から新しい問いを出させることによって、調べ意識を継続させることができるであろう。**
- ア、3年「土庄町全体の様子」では、小学校区ごとの地図や航空写真から、集落を見つけて、町の立体模型にマッチ箱を置いていった。その活動の中から、「たてものが海や川の近くに多いわけを、地形や交通や人の仕事とむすんで調べよう」という調べ問題をつくった。
- イ、4年「くらしとごみ」では、大量で多様な学校のごみの実物を提示することで、ごみの旅について調べようという意欲を高めることができた。
- (2) **グループ調べ・・・一人ひとりの興味関心を大切にしたい調べグループで、役割分担による協同作業を多く取り入れることによって、意欲的に活動させることができるであろう。**

ア、3年の「土庄町全体のような」では、子どもの興味・関心にもとづいて小学校区ごとのグループ編成をした。豊島グループや大部グループには、家族で調べにでかけるといふ子どももあらわれた。

イ、4年では、グループ内で見学や聞き取りの役割分担をはっきりさせることで、一人ひとりが積極的に取り組むようになり、グループ新聞の質も高まってきた。

- (3) 学習ノートの活用・・・自他の考えや調べたことを工夫して書かせることによって、学んだことを確かなものにさせたり、考えを深めさせたりすることができるであろう。

ア、3年では、大きな形式（調べ問題－調べたこと－わかったこと）をきめて書かせたり、よいノートを見せ合ったりさせて、記録することの大切さや必要感を高めてきた。

イ、4年では、グループで役割分担して調べたことを書かせ、そのノートをもちよって、グループで新聞などにまとめさせることで、考えを深めさせたり新しい問題を見つけさせたりしてきた。

9. 高学年団での実践

- (1) 調べ問題のつかませ方・・・単元の導入で、資料や発問を工夫して、子どもの問題意識を高めれば、意欲的な調べ活動ができるであろう。

ア、5年では、産業の現状にふれさせるために、多くの資料や新聞をよませてきた。違いがよく分かる資料を比べたりつないだりさせると、問題意識が高まってきた。

イ、6年では、それぞれの時代の出来事を年表で調べさせたり、その時代をつかむ手がかりとなるような写真を見せたりして、調べる意欲をもたせた。

- (2) 一人調べ・・・資料を精選し、一人調べの時間を確保して自分の考えをもたせ、友達と交流させることによって、資料を読みとる力が伸びるであろう。

ア、5年では、多くの資料の中から自分に必要な資料を選択する力を育ててきた。また、調べる時間を十分与えたことで、まとまりのある調べができるようになり、自分の考えを高めることができた。

イ、6年では、資料をただ写すだけでなく、自分の考えを書き加えさせることによって、一人ひとりに考えをもたせてきた。この調べをグループで表現物に表す際に、それぞれの調べたことや考えたことを出し合わせて、自分にはないものを追加させたり、修正させたりしてきた。

- (3) 学習ノートの活用・・・調べたことをもとに、自分の考えをイラストや図などを使って、ノートや新聞などにまとめていくことにより、表現力が高まるであろう。

ア、5年では、単元のまとめの段階で、グループで「0000ノート」づくりをさせた。調べたことをイラストや図などに表現させることによって、自分なりの考えをもたせることができた。

イ、6年では、一人調べたノートをもとに、グループで表現物をつくらせてきた。回を重ねるにつれて、自分のノートへの追加・修正が容易にできるようになってきたし、表現内容にも、それぞれのグループの個性が見られるようになってきた。

